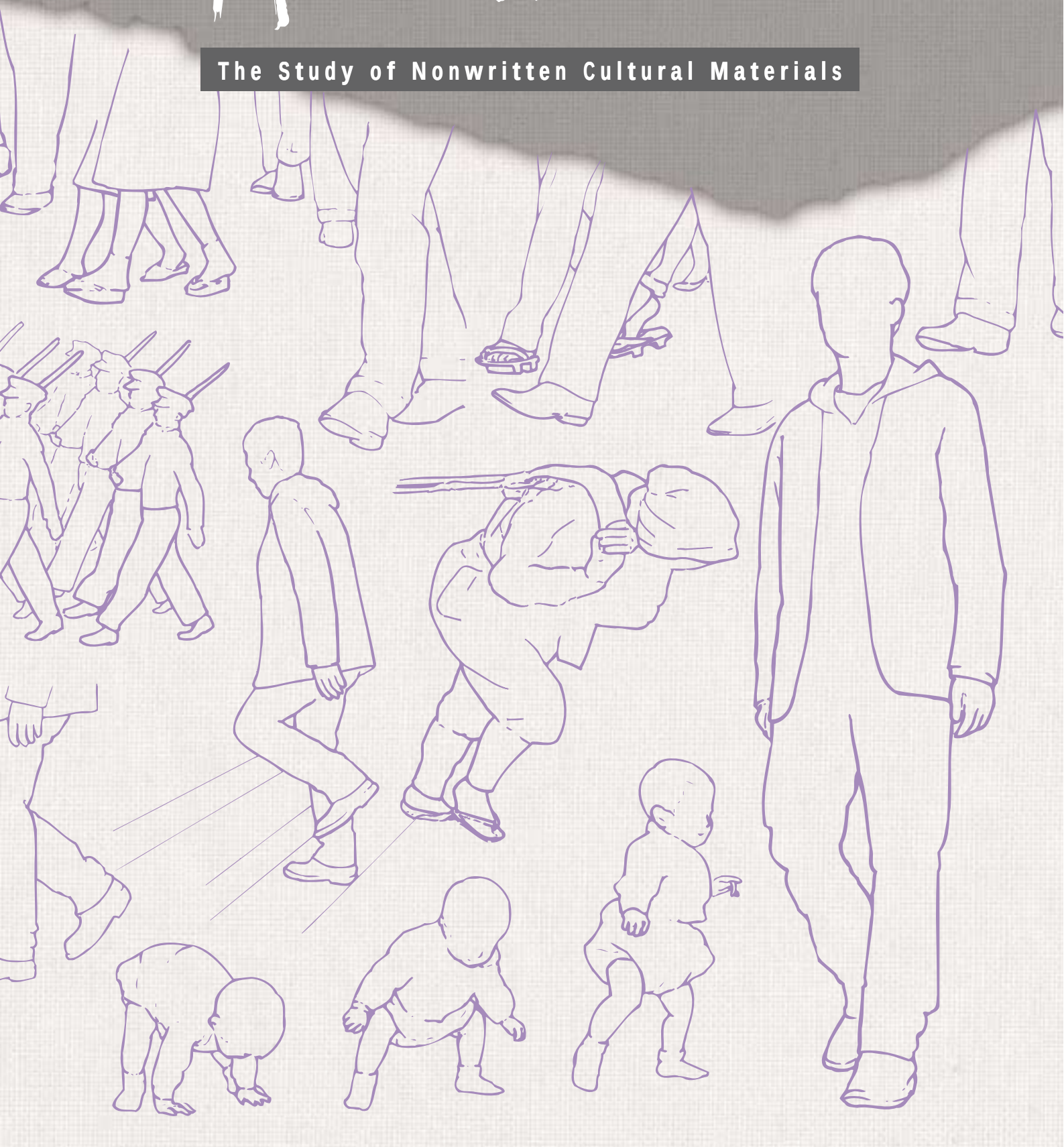
神奈川大学21世紀COEプログラム
人類文化研究のための非文字資料の体系化
Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies

ISSN 1348-8139

News Letter
2007.9
No.17

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials



非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials

News Letter 2007.9 No.17

CONTENTS

Interview 1
5班 実験展示班代表者 中村先生に聞く

実験展示班の企て …… 3
「あるく―身体の記憶―」について
Talking about the Autumn Exhibitions ; Its Theme, " Walking "
中村 ひろ子 NAKAMURA Hiroko

Interview 2
6班 理論総括班代表者 的場先生に聞く

プロジェクトの総括にむけて …… 9
A Summary of Our 5-year-project
的場 昭弘 MATOBA Akihiro

Interview 3
1班 『日本近世・近代生活絵引』の編纂班代表者 田島先生に聞く

絵引作業の舞台裏 …… 15
Some Additions to My Report in the Last Issue
田島 佳也 TAJIMA Yoshiya

研究エッセイ ESSAY

都市景観「いにしえのソウル」の復元 …… 18
The Restoration of Seoul's Landscape
冨井 正憲 TOMII Masanori

研究エッセイ ESSAY

文久2年の「はしか絵」 …… 20
Some Pictures," Hashika-e "from 1862 as Historical Materials
富澤 達三 TOMIZAWA Tatsuzo

■コラム Column …… 22
鳥取県において民具調査を始めて
樫村 賢二 KASHIMURA Kenji

■コラム Column …… 23
「家族」と「故郷」
吳 毓華 WU Yuhua

2006年度外部評価と対応策 …… 24
An Auditors Report of Our Project and Our Response to It
委員の評価（要旨）
外部評価に対する対応策

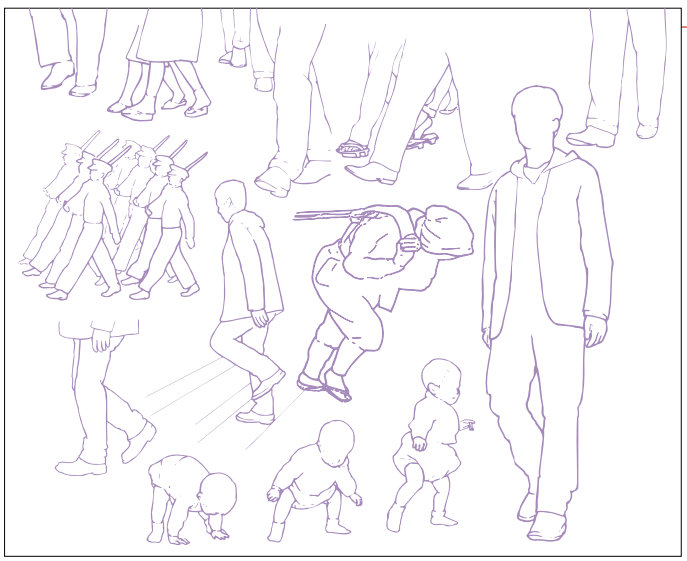
■主な研究活動 …… 28

■受贈資料一覧 …… 29

■彙報 …… 31

■ Information …… 32

表紙説明



今回の表紙は、巻頭インタビューの秋の展示テーマにあるように「あるく」。友人の猿まわしは、いい芸猿を育てる第一歩として、まずきれいな姿勢での「直立二足歩行」を調教すること、と話していました。かつて私が所属していた在野の研究所の機関誌は「あるく みる きく」というタイトルでした。この「あるく」とは、太陽のもとにとび出し自分の知らない世界にぶつかってみることを意味しています。動詞は普遍性の強い言葉ですから、逆に様々なイマジネーションを誘発します。11月の展示はどんな世界を見せてくれるのでしょうか。 （香月 洋一郎）

Interview 1

5班　実験展示班代表者　中村先生に聞く

実験展示班の企て
「あるく―身体の記憶―」について
Talking about the Autumn Exhibitions ; Its Theme, " Walking "

中村　ひろ子（COE特任教授）
NAKAMURA Hiroko

昨年度から、本年秋の実験展示にむけて展示班が動きだしました。これまでそのメンバーのいく人かの方にこの誌面で抱負や想いを書いていただきましたが、いよいよ展示の本番に臨むリーダーにお話をうかがいました。

―いよいよ11月の展示をむかえますが。

中村　はい。まずなぜCOEで展示をするのかについてお話ししたいと思います。COEに限りませんが、このような研究プロジェクトの中に展示というプログラムを組み入れているところはほとんどないのではないかと思いますので。今、研究の成果を社会に向けて還元することが求められていますね。そのためにはどのように発信していったらよいのか。研究成果の発信にはいろんな方法があって、その中心に出版があるかと思います。神奈川大学のCOEでも最終年を迎え研究成果を発信するために数多くの出版計画が進んでおりますし、来年2月には3回目の国際シンポジウムを開催しますが、シンポジウムも発信の有効な方法でしょう。その中で私たちは展示という形での発信を試みたいと思っています。

実はこの展示は「実験展示」となっておりまして、「実験」とあることから博物館関係の方々からはよく「皆を驚かせるようなどんな新しい展示方法を見せてくれるのか」といわれるのですが、この「実験」に込めましたのは、今お話しましたように、研究成果を発信する方法として、展示というものがどれくらいの有効性を持てるのかを検証しようというところに「実験」の第一の意味を置いています。ですから展示場においでいただいた方を展示手法の斬新性で驚かせることは出来ないかもしれません。展示の中身に驚いていただけるとよいのですが。

もちろん、研究成果の発信ということですのでCOEの「非文字資料の体系化」という課題にどう答えるかが課せられていると思いますが、COEは多くのプロジェクトから成っておりまして、それぞれの成果が揃いますのが今年度ということになります。ですからその成果を展示に反映させるのはかなり難しい。展示班では、今年の成果をもとに来年度に展示ということだといいのに、という話も出たくらいです。その中でテーマとして選びましたのが、今回の「あるく―身体の記憶―」です。

この展示テーマについてお話しする前に、研究成果発信としての展示ということについて少しお話をと思います。と申しますのも、展示といえばまず博物館を思いおこされる方が多いでしょうから。もちろん博物館における展示も、学芸員の方々の調査研究の成果還元です。た

This autumn, we will hold a new exhibition at Kanagawa University.
Its theme will be " Walking ". It's just one of our everyday actions,
but we want to think about it from various points of view.
Everyday things are so common, that we often don't recognize their importance.
Though our space is not large, we are trying to make a new style of exhibition.
Walking in the dark, walking on a slope, walking in the grass and walking in the mud ;
Walking is walking, but the action is often unconsciously changed.

「アサヒグラフ」（朝日新聞社発行）の1949年12月14日号に「お履物拝見」とのタイトルで各界名士16人の履物の紹介がされていた。以下はその一部。各々の肩書きは今から60年前の斯界の現役の方々のものになる。

舞踊家
宮　操子 さん

画家
東郷　青兒 氏

拳闘家
白井　義男 氏

東大教授
渡邊　一夫 氏

だ博物館の学芸員の方たちはご自分の研究テーマや関心だけでなく、地域が抱える課題や利用者の方たちが知りたいと願っていることを、あるいは潜在的な関心を読み取って展示テーマを選んでいらっしゃるのではないでしょうか。今回の私たちはCOEが新たな研究領域を切り開きたいと願って、こういうことをやりましたということをある意味一方向的に、みなさん興味があるかどうかはわかりませんが…、というところからのスタートになる。そこに違いがあるように思います。

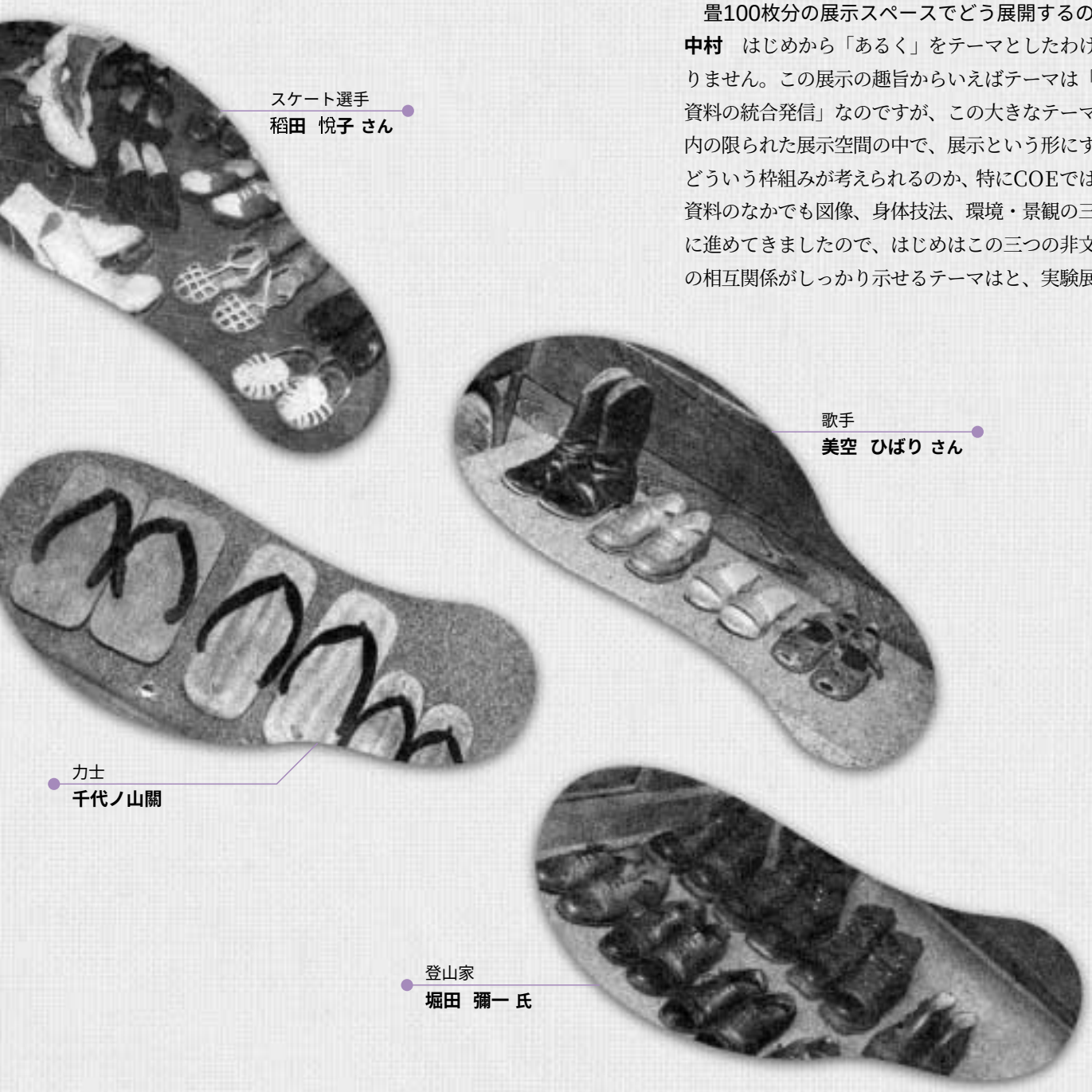
一方、例えば印刷物による研究成果の発信と比べましてもいくつか違いがあります。まず、対象のひろがりが異なります。基本的に報告書などの出版物は研究者に向けてですよね。いわば仲間内への。展示は研究者の方に向けてと同時に、報告書などはお読みにならないお子さんから大人の方まで、そして展示場の、神奈川大学のあります地域の方々にも見ていただける、いや見ていただきたいものです。そういう意味で発信の中身は同じでも対象が違う、他のCOEの発信との役割分担と考えたいと思っています。

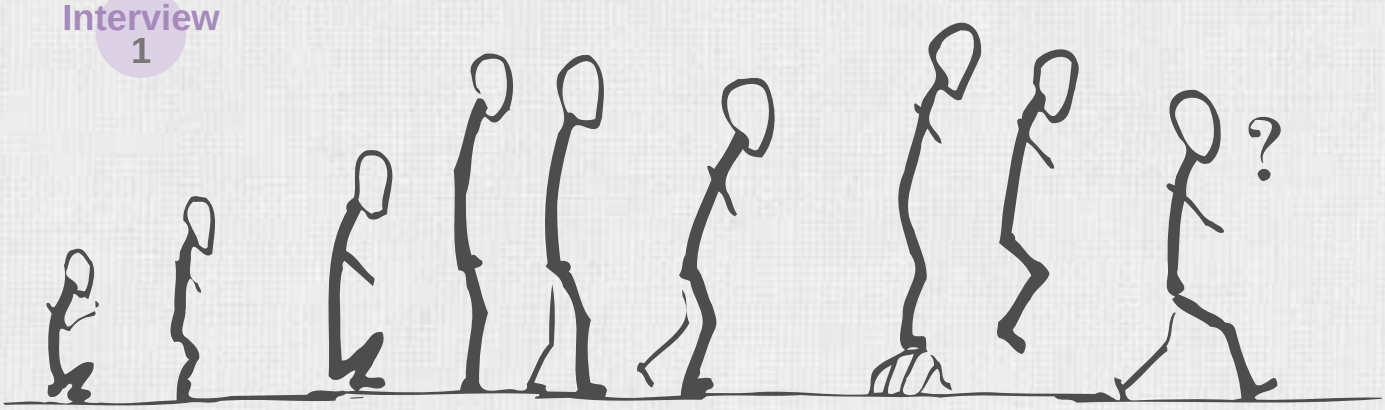
今一方向的発信になると申しましたが、それはテーマの選択にあたってのことで、展示は出版物とは異なり基本的に発信者と受け手が同じ時間、同じ場所で交流ができることに特色があると考えています。展示はどなたかにわざわざ来ていただいて、その展示の前に立っていただく、そこに初めて展示という行為が成り立つものだと思いますので、もともと参加が前提ですが、今回はもうひとつ、展示の制作にも評価という形で参加していただけたらと。評価といいましても出来上がった展示の評価だけでなく、制作途中での評価を考えています。まず、今回の展示テーマへの関心や興味のあり方を学生や一般の方々からアンケートやインタビューでうかがい、展示の導入や展開に生かしたい。次いで展示のストーリーや展示方法が固まりましたら、解説ラベルの中身や文体、字数から動線、空間のデザイン、照明、今回でいえば体

験の仕掛けなどまで、様々な面からの展示のメッセージがきちんと伝わる展示になっているかどうかを評価していただく。出来ればオープン前に、そしてオープン後も評価を聞き、修正できることがあれば手を加えていく、ということができるとよいのですが。そして、最後に展示批評という形で評価をいただけたらと願っています。展示途中評価はやっと試みる博物館が現れはじめたところですが、展示批評の方は学会誌などで定着しつつあります。といっても書評に比べましたらまだまだです。一番の問題は特に企画展など期間が限定されていて、書評のように書き手とは別の人がそれを検証できない、批評された側も反論できない、なにしろ消えてしまいますので。その意味では劇評や演奏会評に近いもので、それはそれで生ものですので仕方がないとは思いますが、今回のように研究成果の発信という意味付けをした場合、それでよいのかということで、展示を映像に残せないかと思っています。ただ、専門家の手になるものではありませんが、一応展示終了後も検証の対象でありたいとは思いますので。

—「あるく」がテーマと聞きました。「歩く」というのは動詞。動詞は一番普遍性の高い言葉ですね。いろんな意味で「歩く」という言葉はつかえる。それを畳100枚分の展示スペースでどう展開するのか…。

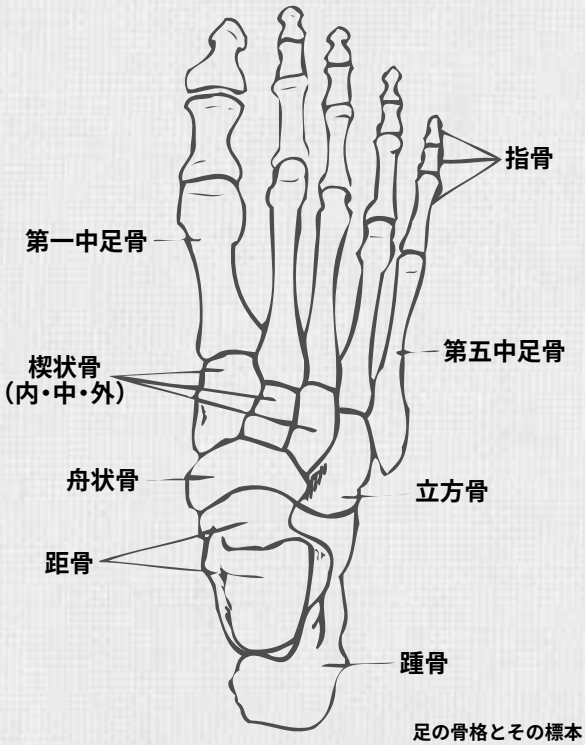
中村　はじめから「あるく」をテーマとしたわけではありません。この展示の趣旨からいえばテーマは「非文字資料の統合発信」なのですが、この大きなテーマを大学内の限られた展示空間の中で、展示という形にするにはどういう枠組みが考えられるのか、特にCOEでは非文字資料のなかでも図像、身体技法、環境・景観の三つを柱に進めてきましたので、はじめはこの三つの非文字資料の相互関係がしっかり示せるテーマはと、実験展示班内





佇立と歩行の進化のコース
「ヒトの足―この謎にみちたもの」（発行：創元社）より

で検討しました。その中で、展示をご覧いただくのは必ずしも研究者の方々だけではありませんので、まず非文字資料という存在そのものを広く知っていただくことに意義があるのではないか、従来の文書をはじめとする資料でなくても、図像、身体技法、環境・景観などからも私たちの歴史や文化、くらしを明らかにできるのだということを、「こんなことも資料になるのだ」ということを伝えることからはじめようということに。展示を見る方それぞれが、ご自分の身体という存在を通して非文字資料に出会って下されば、ということで身体技法をテーマとしました。ただ研究上の概念用語ともいうべき「身体技法」に代えて「身体の記憶」という表現を選びました。正直なところ「記憶」というのは多用されている感もあって新鮮味に欠けますが、イメージも伝わりやすいのではということで。



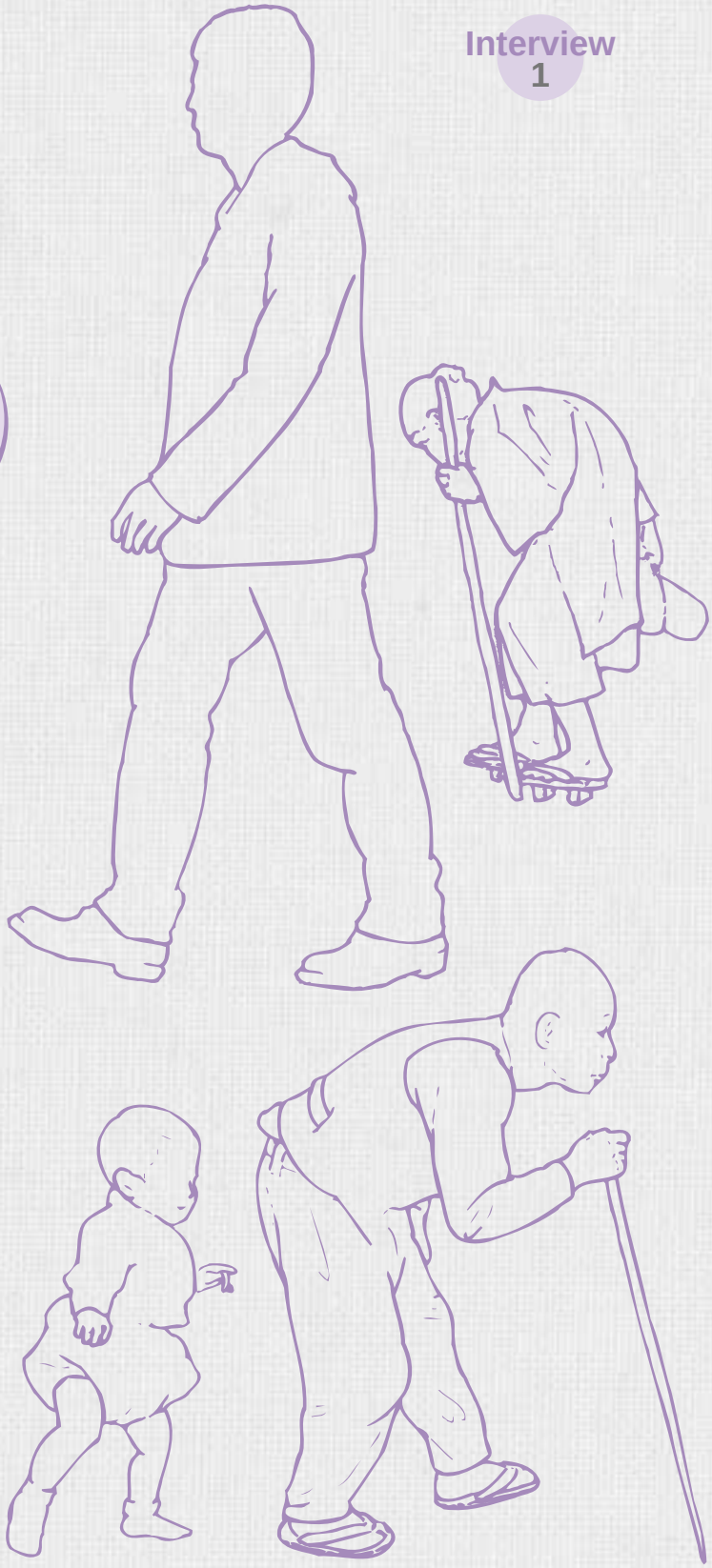
足の骨格とその標本
「ヒトの足―この謎にみちたもの」（発行：創元社）より

私たちの身体の中には行為とか動作とかというかたちで蓄積されてきた記憶があると思います。そこには何代にもわたり受け継がれてきたもの、自分で作り上げたもの、あるいは意識的なもの、無意識的なものなど様々なものがあるでしょうが、展示を通して自分の身体が記憶しているものに出会って欲しい、ひいてはそこから非文字資料という存在にも出会って欲しいと。ここまできて、では身体技法の何をということに…。本当に多様でいくらでもあるわけですので、かなり論議をしていろんな案が出ましたが、最終的に「あるく」になりました。

確かに「歩く」は一番基本的な動作ですが、展示にはそぐわないかもしれない、一番展示しにくいだろうという論議がありました。ただ、それはまた、どこにも展示したことがないということでもありますから、その意味では最初に言いましたのとは別の意味で「実験展示」になり得るのではないか。といって、たとえ研究成果の展示だ、実験だといってみても、来ていただいた方に楽しんでいただけたり、いろんな新たな発見があったりという展示でなければはじまりませんが。

長々とテーマが決まるまでを話してしまいましたが、まだまだ「歩く」の何を見せるのかの論議が続きました。現代の私たちに限っても、その歩き方は一様ではありません。私たちは人の歩いている姿から様々なことを見て取ります。年老いているか若いか、男か女か、職業や地位は、といったことはもちろん、気ぜわしそうだとか、とぼとぼと元気がない、といった状況、表情までも読み取りますし、また同じ人でも服装や履物によって、荷物を持っているか、子どもの手を引いているか、あるいは山道か闇夜かなどによっても歩き方は変わりましょう。しかし、歩き方を変える、あるいは歩き方が違うといったとき、「歩く」という動きのどこに変化や違いをみているのかということになりますと、必ずしも明らかではない

**展示会場にいらして、ぜひ「あるく」に参加してください。
明日からは、街を歩きながらつい自分の歩く姿を
ショーウィンドーで確認したり、歩きはじめに手と足を
どう出したらよいかと考え込んだり。
ぎこちない歩き方になるか、歩くのが楽しくなるか…。**



のです。「普遍性の高い“歩く”っていう言葉、それを畳100枚分のスペースでどう展開するのか」と尋ねられたように、まさに何をということになりましょう。そこで、現代の私たちはいろいろな歩き方をしていますが、昔からこういう歩き方をしてきたのだろうか、ということに絞ることにしました。そして図像資料を使いましょうと。日本常民文化研究所が『絵巻物による日本常民生活絵引』として編纂した中世の図像資料や、昭和初期に澁澤敬三が撮影した映像資料といった、神奈川大学で持っている資料を使って、日本人の「歩く」ということを考えてみましょうということになりました。例えば、現代とは異なるナンバという歩き方、行進のように近代が作り上げた歩き、芸能や能などにみられます長年かかって作り上げられた歩きなどを通して考えてみましょう、というようなところでだいたいの骨格みたいなものが一応できたということなんです。図像資料から歩き方をきちんと認識するのは難しく、動く映像となると時代が限られるという問題はありますが、目的は「歩く」ことに関する研究成果の発信ではなく、身体が持っている記憶に出会ってもらうということですから。

こうして骨格ができたところで、いよいよ展示計画を立てる段階に入りました。展示会場を大きく二つに分けたいと思っています。一つが「歩き」を体験する体験回廊とも呼ぶべき空間です。そこで人々はスクリーンに映

**“Walking” has various meanings. Some people may imagine sunbeams,
if they like taking walks. Some may imagine a rustic location without machinery.
And some people may imagine mankind itself,
because walking erect shows the difference between mankind and apes.
Walking erect out of the forest may have been our first steps taken.
There are many ways and possibilities to exhibit “Walking”.
We have been discussing them for over one year.**

し出される映像を手本に様々な「歩き」を体験します。いつもと違う歩きをしてみることで、自分の身体が記憶している歩き、あるいは記憶していない歩きに出会います。そして回廊を出まして、展示されている資料を手がかりに、今体験した様々な歩きについて検証するというか、整理してみるという構成を考えてみました。

この他、展示会場内にぬかるみやでこぼこ道、あるいは暗闇を作り歩いていただこうかとの案もありましたが、展示会場や安全性の点から実現を諦めました。いろいろな履物を揃えておき、例えばアシナカや田下駄、男の方にハイヒールなど、日頃とは異なる履物に履き替えて歩いてもらい、歩き方のどこが変わるのかを感じとってもらうという案は検討中です。いずれにしましても、体験というプログラムを組むためには人とプログラムを結ぶ人の存在が欠かせませんので、博物館学を学んだり学芸員を志向している院生の参加を得たいとは思っています。

また、制作途中への参加の話のなかで、この展示にはできるだけ様々な方々に様々な形で参加していただきたいと申しましたが、そのためにはバリアフリーという課題があります。今回は展示会場の構造からいって厳しいものがありまして、入口や動線を変えることで少しは対応するということしか出来ませんし、展示そのもののバリアフリーにつきましてはその方法について必ずしも論議が深まっておりませんが、今回の展示が非文字資料を多用し、体験を伴いますことから何らかの方法をと考えました。いくつかの博物館で試みがなされています、触る展示をと思い、先日も盲支援学校の先生にご相談にうかがったりしておりまして、いまだ模索中です。

もうひとつ考えていますのが、展示をつくる過程を報告書として残そうということです。展示批評のところでも触れましたが、展示は消えてしまいます。出版物だったら残るのですが。そこで、展示そのものの記録もですが、制作過程を、今私が話しているようなことも含めて記録する。毎回の班会議の様子を記録していますので、その中の主だった議論を、例えばどのような提案があり、それに対してどのような意見が出され、どのようなやり取りがあって展示として立ち上がってきたのか。諸般の事情で諦めざるを得なかったのか、などなど。これもひとつの試みかと思っております。

11月にはぜひ展示会場を訪れ、体験し楽しんでいただくという形で、あるいはご批判をいただくという形で、私共の企てに参加してくださることを願っております。

（2007年7月9日　於COE共同研究室　聞き手：香月洋一郎　記録：小野地健）

実験展示開催予定

入場無料

「あるく―身体の記憶―」

●日　時：2007年11月1日（木）～30日（金）10:30～16:30　＊11月3･4日を除く日曜・祝日は休館
●会　場：神奈川大学横浜キャンパス3号館　常民参考室
●主　催：神奈川大学21世紀COEプログラム
「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
●趣　旨：（1）COEの研究課題である図像、身体技法、環境・景観の体系化という成果を展示という形で社会に還元し、非文字資料という新たな研究領域の持つ可能性を、研究者だけでなく広く市民に向けても発信する。
（2）発信にあたっては展示制作途中の市民による評価の導入など、市民が参加して展示を作り上げる展示手法や、展示が持つ視覚、聴覚、あるいは言語といった様々なバリアを超える展示手法など、展示に「実験」を試みる。

Interview 2

6班　理論総括班代表者　的場先生に聞く

プロジェクトの総括にむけて

A Summary of Our 5-year-project

的場　昭弘（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　教授／事業推進担当者）
MATOBA Akihiro

COE最終年をむかえると、プロジェクト全体を把握すべく動く「理論総括」の班の作業の重要度は加速をつけて増してきます。これまでこの班のお世話をされていた的場先生に総括への展望を語ってもらいました。

―今までのCOEの流れを見ていますと、色んなかたちでの矛盾もあるんですが、その矛盾を解決するんじゃなくて、矛盾とどう付き合ってきたかをきちんと出せれば、おもしろいプロジェクトになるかなと思ったりするんですけれども…。

的場　今、大学院の授業で、ポール・リクールの『記憶・歴史・忘却』という書物（久米博訳、新曜社）を読んでいます。で、たまたま今週の部分はプラトンの『パイドロス』という作品の分析です。プラトンは、ここである国で文字（パルマコン）が発見されたときの逸話を書いています。発見者は大変便利なものだと思い、それを王のところへ持っていって、「文字を発見したんですけれど、それによってすべての問題が解決します」と意気揚々と述べるわけです。例えば、「文字の発見によって、今までなかなか記憶できなかったことが記憶できるようになり、記憶量が格段に増えます」と。それを聞いた王は、「いや、それは逆だろう。文字を書くことで、記憶が無くなるじゃないか。だから、この文字というのは、決していいもんじゃない」と否定するわけです。

そこで起こった問題とは、文字ができたことで、会話にあった躍動感というのが消え、まったく感動のない無機的な言葉が出現したということです。そもそも文字は、今前にいる人を意識せず、まったく別世界の人に向けて発信しますよね。話す言葉は、そこにいる人の顔を見ることで臨場感を持つ。しかし文字というのは、まったく臨場感がない。これは、人間にとって薬なのか、それとも毒なのか、という問題が出てくるわけです。

何かを記憶するために文字に書きとめることによって、本当に過去の事実を正確に伝えることができるのか、という問題がそこにあります。ちょうどソクラテスは彼以前の哲学との端境期にいるわけです。なぜならそれ以前の哲学者は、文字で表現しなかったからです。ソクラテス以前の哲学者は、書かないことで、そこにいる人たちに説得することだけを哲学の目的にしたわけですが、そもそもそれこそ哲学であったわけです。それが、文字に書き残されることによって、そこにいる人じゃなく、誰かわからない人に向けて話す哲学が生まれた。こうして、哲学、言いかえれば西洋の学問が生まれたわけです。それまでの学問は、そこにいる人との会話です。それ以降の学問は、まったく不特定の人間との会話です。こうして文字に書き残されることで、ソクラテス以前とソクラテス以降の哲学は大きく変化したわけです。

ここに、当然いろんな問題が表れています。文字を書くということは、表現できないものまで含めて文字に押し込むことを意味します。例えば、そこにある本箱を本箱、カメラはカメラと表現する。実はこう表現することで、なんとかそこにあるものを表現できた気になる。しかし、それはここにある本箱やカメラを意味しているわけではないわけです。そもそもそれだけではそこにある本箱やカメラを本当に認識することはできないのです。ただ文字に表現することで、形だけはなんだかわかるという曖昧な認識ができたという程度にすぎないわけです。ここに文字の限界があるのですが、それは人間があるものを認識する限界というものを表現しています。つまり

外の世界にある本箱という現実と、言葉によって表現されている心の中の世界とのズレです。心の世界というのは、文字や言語を通じて理解できる悟性の世界であり、外の世界とは身体を通じて感覚的に理解する感覚の世界です。ソクラテス以降の学問は、この頭の中の世界を問題にするようになったわけです。そういう意味で、非文字という私たちの研究テーマは、まさにこの文字で表せない世界、つまり頭のうちにある形而上学的世界、ではないものを分析することになるわけです。外にある生々しい生きた現実、触って、こう、冷たいとか熱いとか感じる、こういう世界を分析の対象とすることになるわけです。これは大変な問題、真っ向からこれまでの学問の方法に立ち向かうことになりかねないわけで、最初から大変な仕事になることは、わかっていたわけですよね。

とはいえ、まず話すこと、つまり今しゃべっているこの言葉とそれを文字という表現形態に直す間にある違いがあります。話すことは、相手の顔を見たり、状況で判断するので、非常に生きた感覚に近いですよね。確かに頭の中で文法的に構成されている点において、文字に似ているわけなんですけれども、しかしながら実際にしゃべっている人は文字からかなりずれています。その意味で、会話は文字以外の世界に近いと思います。もっとも、今回私たちの具体的な研究テーマの中には、この会話というもの、すなわちこの文字ではない世界、が含まれません。しかし、われわれのテーマは、この外の世界、感覚的な世界というものを、どう認識として取り込むかというところで挑戦しているんだと思いますね。これはとにかく、哲学最大の課題であり、2500年の歴史の中でさえ解決できていない問題なのです。

—今言われた文字と言葉というもののほかに、例えば音楽とか身体技法といった表現文化もあります。それを文字発想の中におさめてみようという試み、それをその分野に応じて、どうまとまらないかということを、少しでも洗練されたかたちで出せれば、と思うんですけれども。まったくフリーに、試みとして自由にやっていいよというと、逆にもうカオスだけになるみたいな。

的場　そうですよね。ですから、カオスに陥らないために具体的なもの、例えば、机なり、イスなり、具体的なものを取り出せばいいのですが、それだと百花繚乱になります。もうひとつ切り替えて考えると、基本的に私たちの研究分野は、歴史学だとか、民俗学だとか、あるいは人類学の分野の研究ですよね。そうだとすると、文字であるか文字でないかという対象の問題をあれやこれやと問題にするより、それを認識する側の頭の構造の方に、むしろ問題を持っていった方がいいと思うんです。つまり、民具や身体がどう非文字であるかという問題よりも、民具や身体をどのように理解しようとしているのか、どのように認識していると思っているのか—誤解も含めて—、そこらあたりの方を、むしろ問題にする方がいいのかなと思います。この前、国際シンポジウムでもそういう話をしたのですが、どう認識しているのかという点が、まずはキーポイントになるんじゃないかという気がしています。

—反発しない、でも融合もしないんだけれども、なにかつなげる橋を模索するというのはできるはずなんだけどな、という気はしたんですが…。

的場　認識論的立場からすると、認識にはその時代の時代性があるし、認識するための様々な時代的制約があります。だから、認識しようとすることはある意味で時代的制約を理解することです。だからいずれの時代にも共通する認識法則などないと考えた方がいい。同じような記号があったとしても同じように認識しているわけではない、意味することがまったく違うと、考えるわけです。しかしそうするとなかなか研究はしづらい。

例えば、4世紀、5世紀の農民も、民具を私たちと同じレベルで認識していると考えた方が、説明としてしやすいでしょうね。だから、ある道具を見てこれは間違いなく野良作業の道具で、こんな風に使う。大きいか小さいか、あるいはどういう風に使うか、若干差はあるけど、基本的には我々の経験内で考えよう、という発想になりますよね。しかし記号論的に考えると、そうとは言えない。そのように言えるためには、それを道具として使うという歴史的認識が必要です。例えば、河野通明先生のお話で、民具を普及させるために民具の縮尺モデルを配ったという話がありました。しかしモデルという発想自体が、近代の発想ですよね。また今であれば宅配便で送ればいいのですが、交通手段を考えても、簡単ではない。古代の様々な事象を近代的な概念や発想で把握することには注意をしなければなりません。もう一回古代の歴史状況、そして彼らの発想に遡って、チェックしないといけないでしょう。こうした意味を精査しないとそもそも

証明にならない。つまり、いつの時代も同じ人間がいて、同じように発想するという考えは、歴史を説明しようとして歴史を否定してしまう。じゃあどうやって証明するのかというと、そこに深刻な問題が出てきます。でも、そここそ、実は私たち非文字研究が貢献する最大のポイントがある。つまり、たぶん古代の人は、同じ民具でもまったく違ったものとして使っていて、違ったものと見ていただろうと考えるわけです。そして、違ったものをどう理解するかということが、私たちの研究ならば、まずは今までの発想を変えてみる。そうすれば、これはすばらしい研究になるでしょうが。

—文字と非文字という言葉を一応は使っていますが、的場先生の言われるのは、その認識のあり方がテーマであるという部分があるんでしょう。

的場　ええ、ですから、対象はなにかという問題ではないわけです。対象をそれぞれやること、たとえば身体技法をテーマとしたり、景観をテーマとしたりすること、それはそれとして大変興味深いことです。しかしそれを理論的に分析することは、それをどう認識するかということ、つまり解釈の問題になるわけです。そこをポイントにすれば、民具であろうと、風景であろうと、あるいは、絵画であろうとも、共通項が見出せるだろうと、そういうところから、そういう方向から考えてみようと思ったわけです。神話と歴史という相対立する二つの分野はありますよね。これは、宿命のライバルです。しかしこれは時代の表現形式の違いに起因するところが大きいわけですよね。ある時代までは基本的に歴史学は神話であったわけです。それは、表現媒体として神話という方法しか持っていなかった。つまり、近代の合理主義精神を持っていないがゆえに、あることをいわゆる事実認識として表現するという志向的な価値観がなかった。だから、事実認識よりも、物語的な表現力に価値を見出すわけです。つまり、私たちは今、合理主義的世界に生きています。だから文書資料に基づいて、事実を克明に知ろうとする。だから、きわめて合理的に説明します。しかしこの合理的説明は、その合理的な説明という価値観を持たない人たちにとって、ほとんど説得力を持たない説明です。合理的でない説明をしたほうが、彼らにとってはすっきりする。つまり、その方が、聞く気になるし、理解できる。むしろそういう方が説得力があるわけですよね。史料による歴史は聞いているだけで眠くなるけれ

呪力を宿す文字
かつての鴻巣警察署（埼玉県）のポスター。
「悪魔病魔除之警札」の文字が睨みを利かしている。

ども、突然、空から神が降りてくるような話は、つまりメタファーであったとしても、その方が効果的です。最初のソクラテスの話に戻ると、聞いてくれる相手がいれば、話にはレトリックが必要となるわけです。聞いている人は必ずしも、近代的な価値観、すなわちことの是々非々という客観性を求めていない。過去の人々は、その意味でまったく別の世界に生きていたとも考えられるわけです。別の世界を認識するというのは難しいことです。私のように詩的センスのない人間が、外を見ていたとしても建物ぐらいしか眼に入らないのですが、感性の豊かな人には別のものが見える。それを見ながら詩を詠んだりする。歴史家はどうやら近代主義に凝り固まってしまった。19世紀に支配的になっていく、客観的な科学主義にはまってしまったために動きがとれなくなったんです。私たちの頭の中にある記憶の世界は、まさに神話の世界にたぶん近いと思います。誰も、合理的かつ計算的に、頭の中に記憶を押し込んでいるわけではなく、非常に曖昧な、本当にあったかどうかわからないものも、自分はあったと思って記憶してしまいます。彼は嘘をついているわけではないわけです。話をする分にはこうしたことはたいした問題ではないわけで、相手と話がうまくいっていることの方が重要なわけです。そうした会話の中であえて正しいかどうかを問いただすことは野暮です。そ

うすると人間関係は壊れる。このことに、歴史学は柔軟になるべきだと思います。歴史学は科学主義に堕すると、犯罪を問いつめ責任を追及する大審問官になってしまう可能性がありますよね。しかし、大審問官は自分の正しさを絶対的に確信しているわけですが、実はかなり曖昧なわけです。だから、非文字資料の研究はその意味でも、これまでの歴史学の方法、つまり合理主義的方法に疑問を提言することができるわけです。まさに、文字、記録の裏を探ることで、そういう側面を見つけ出すことができるはずです。

例えば、昨年10月の国際シンポジウムの報告で私が興味深く聞いたのは、韓国から来られた方（金光彦先生）の報告です。民具の道具以外の意味を問いただしていましたね。つまりそこでは農耕の道具ではなく、ある社会の人間関係を表すメタファーでした。つまり農民にとって、ただの道具ではなく、もっと奥の深い、様々な関係を表す表現媒体だったわけです。これは非文字というものの可能性を秘めた報告だったのではないかと思います。要するに非文字資料という課題を出しながら、われわれは意外と文字的、すなわち合理的に発想してしまうわけです。文字というのは対象を合理的にとらえようとしますから、意味がかなり限定されてしまいます。何か規範的な意味をつくってしまう。規範を超えた世界に踏み込むには、そうした規範を超えた論理というものを導き出す必要があると思います。

—近代というのは強迫的なまでに、固定化を求めます。当然それには反発が出てくる。それは場合によっては、神話的な性格を帯びるかもしれないのですが、でもそれは近代の中にある固定化への衝動の存在ゆえに、あぶりだされてきた神話性だとすると、それも基本的には近代ということになりますね。

的場　そうですね、どこまで行っても近代から出られないのかもしれません。それは当然の限界だともいえます。過去は現在に生きている私たちの頭の中にしか再現できないのですから、当然近代に生きている私たちのイメージが反映せざるを得ないわけです。

—このテーマには本質的に、近代性をどう理解するかみたいなことが、べたっと裏側に引っ付いている…。

的場　そうですよね、ええ。ですから、先ほどの『パイドロス』の中で、ソクラテスはこういうわけです。自分がどんな風にして人に話をしているか。実は相手のレベルを見て話をすると、相手がわかるレベル、要するにおばあちゃんの前だったらおばあちゃんたちのレベルに合わせて話をする。説得というのはそんなもんで、弁論術とはそんなもんだ。だから、弁論術というのは、実はこれは重要なことで、相手にあわせる。客観的な真実なんか、そもそも意味がない。ところが、近代の私たちの学問は、こうした生きた人間を相手にする弁論術というのを失った。今大学で教えないですよね。修辞学もないですよね。あるのは、とにかく説得力のない機械的な文章を書くだけ。無機的報告書類の山ですよね。

—俗に言えば、論理で説得されても、感性は反発するということはあり得ます。

的場　まさにそれこそ、感性の世界から論理の世界に移ることによって失われたものですよね。それは、はっきり大学の学生の反応に現れているわけです。「先生の授業つまんない」と。たとえ面白くするために新宿へ出かけて行ったとしても、先生が単に知識を媒介するだけで、生身の人間としてその魅力を出さない限り、つまんないですよね。あることを媒介するだけでは何も生まれない。学生の分かるレベルで説明してあげるしかない。客観的な真実というのは、ポンと外からしゃべる概念じゃなくて、その学生たちの分かるレベルに入れない限りほとんど無駄であるわけです。

—あともうひとつ、前から気になっていたのは、なにかの折に的場先生が言われた、こういう文化の研究をやるときに、政治的なファクターというのを無視したら、ちょっと能天気じゃないかという御指摘なんですが。

的場　哲学の中に存在論という分野があります。例えば、この茶碗はどこにでもある茶碗ですが、そこに置かれている状況というようなものを持っている限りにおいて、他の茶碗ではない、具体的な茶碗ですよね。私たちだって、ものを書くとき、一研究者として客観的な立場にあるつもりでいながら、ある立ち位置に立っているわけですよね、それぞれ政治的な意味の立ち位置もあるし、経済的な立ち位置もある。政治的というのは、まさにその立ち位置、存在について議論するということです。そこに置かれている場、客観的に空虚に置かれているのではなく、何らかの役に立つために置かれている。人間の場

営業に励むエビスさま（かつての引札から）
　エビスさまとは現世利益を願うシンボルでもあろうが、エビスさま自身が帳簿をめくり電話をかけると、そこに妙な生々しさがあらわれる。信仰の世界と現実の世界は、交錯のありようによっては不思議な不自然さをかもし出す。
　引札の左側に「近江國愛知川町字中宿」との文字が読める。現在の滋賀県愛知（えち）郡愛荘町のことだが、この町に含まれる旧愛知川村が愛知川町となったのは明治42年（1909）のことだから、この引札がつくられたのはそれ以降ということになろう。

合、非常に狭い意味で政治的な状況として表れ、もっと広い意味で全体の社会における立ち位置として表れるわけです。例えばあるものを記録しようとするとき、どれもこれもすべて記録しているわけではなく、記録すべきものと記録すべきでないものを分けて記録するわけです。なにを残すかは意図的ですよね。その意図というものも、私たちの研究は探らなければいけない。そういう側面を抜きにすれば、われわれの研究は空虚な事柄の羅列になりかねないと思います。

―抑圧されているというのは、自己規制というのもあり得るわけですよね。自己の存在自体も、周りの状況が深く及んでいる部分があるわけで。

的場　ポール・リクールは先ほどの書物の中で、「忘却」について触れています。人間は記憶すると同時に、忘却もします。記憶の中に残っているものは、客観的なものではありません。記憶は、想起するたびに、別のことが刷り込まれていくことでどんどん変化していく。最初にあった原記憶というものが、どんどん薄れて変わっていって、本人も忘れてしまい、いま記憶していることが真実だと思っている。その中で、なぜ忘却したかという問題がでてきます。語りたくないこと、それをいつの間にか忘れていく場合、意識的に忘れてしまう場合、というのがありますよね。こういう忘れていくものを記憶として再び持ち出すことは可能かどうかという問題です。要するに、強制的に忘却されていく記憶の問題。意識的には思い出せない、なにかトラウマのような潜在意識の彼方に忘れてしまったもの、こういうものが人間の認識の深部にあります。

―個々のテーマでこれだけやりましたということを、単品で並べても、本当はこのテーマの本質とは無関係なんでしょうけれども。

的場　理論班というのはその意味で微妙です。そもそも各班の理論を統括する形なんかでまとめることなどできないわけです。グループにもそれぞれ理論があるわけですから。理論がない個別研究などあり得ない。それなのになぜ理論班が必要なのか。できたこと自体他の班の理論を批判するためであったわけです。だから理論班に対する風当たりは強いわけです。じゃあ理論班の役割とはいったい何なのか。皆さんは、なにか現実とかけ離れた、訳のわからないものが出てくるんじゃないかと危惧されている。まあ抽象的な議論がいやならば、何らかの形で、それぞれが、自分の研究の枠の中で、理論を提起すればいい。たぶんその形で出てくるしかないだろう、という気はしているんですが、しかしそれではバラバラであるわけで、強引に理論班は批判を覚悟の上でまとめをせざるを得ない。

―理論班というのは、それぞれの関係性がなにかということを見ていくんでしょうが、逆に、ほとんど関係がないという結論が出たという場合は、それで行くしかないんですね。

的場　と同時にやっぱり、理論的な総括もしたいという気もします。それが汎用性があるかないかということはあるでしょうが、そうした理論から見ると、ちょっと自分のやっている研究は危ないな、証明になってないな、このままじゃだめだなということを、やはり理解していただく必要はあるわけです。差し出がましい話ですけれ

ども、そういうヒントになることを提案するのが、たぶん私たちの班の目的ですよね。そういうことが出来れば、たとえ机上の空論であったとしても、何らかの意味を持つのではないかと思います。

―機能としては、相互刺激の場がそこに生み出せれば、もうそれで…。

的場　そうですよ。だから、噛みついてくる人は最高ですよ。理論班の役割はたぶん、それぞれが、マニアックな世界の中でやっていることを表に引きずり出し、こんなことをやっているんだということを、わかるように説明するという、一種の広報的活動でもあるわけです。COEの外部評価の際、キーワードを作ったらどうかというのがありましたよね。非文字ではたぶん誰も検索してくれないだろうと。たとえば、「記憶」だとか、「忘却」だとか、そういうキーワードを使うとアプローチが増える。しかし、研究者の立場から見ると、「記憶」や「忘却」なんで、研究の内容を表さないではないかという声もあるでしょう。これはあくまでも情報を受ける側の関心に狙いを定めているわけですからそれも致し方ない。こういう共同研究の場合、キーワードを作ることで逆に自分の位置が分かるのではないかと思われます。ひとつのキーワード、かなり汎用性のあるキーワードを作ると、お互いの関係がよく分かる。

数字の世界を例としてとるとこうですよね。非文字は整数を除くすべての数字であるとしましょう。1、2、3という整数、すなわち文字があると、非文字は整数外の全部を対象としているわけです。整数外のもの全部を対象としているといいながら、一方で、具体的にはいくつかの数字、たとえば1.5だとか2.5だとかを選んでいるわけです。だから、それ以外のものを説明するのはかなり困難なわけです。整数を扱うように帰納的にやったのでは、説明できない。このいわゆる具体例の背後にある空間ですね。例えば1と2の間にある空間をどう説明するかというとき、必要なのは帰納的方法ではなく、もっと抽象的な方法が必要になる。ここがたぶん理論班が補う部分です。

その帰納レベルであったことをそのまま抽象的なレベルにもっていけるような理論を組み立てられればいいんですが、それができなければ、たぶん非常に個別的な部分が分かるだけになる。三つか四つの例を提示すれば、それで分かるというだけでは説得力に欠けるわけです。そこはやはりそこを超えるような、つまり三つ四つの例もあるが、そこからもっと広い領野が見えるようなものがいえないと、多くの人が関心を持ってくれないだろうという気がします。

こうしたかなり曖昧なタイトルをつけたことによって、それぞれ自分のやっている研究が客観的にどう見えるかということが分かったという点では、非常によかったと思いますよね。COEがなければ、ほかの分野の人がそれぞれの研究に関心を持つことはなかった。これまでのいわば職人的研究スタイルを超えて、なにか、それぞれの分野が横断的に理解できる可能性が開けてきた。そんなチャンスができたという点では、非常によかったんじゃないかと思いますけどね。

―対象を限定しないと「方法」というものは立ち上がってこないと思うんですけれども、その限定の仕方ですね、従来発想的なテーマ、たとえば民具であるとか、写真、絵画であるとか、というよりも、さっき言われた、認識のあり方がどっかに引っかかってくるようなテーマ設定とか、それから近代というのがなにかみたいな問いが明確に問題認識としてついている作業のほうがたぶん、より現実的な展開力をもつのかもしれませんね。

的場　そうですね。いずれにしてもわれわれは21世紀前半の今を生きているわけです。だから、現実との接点を失うことはできない。接点を失えばその研究自体も需要がなくなるし、研究自体の意味もたぶん問われるでしょう。やはり存在していることの意味ですよね。21世紀の研究者である私たちは、何でこんな研究をやっているのかという問題をつねに問い続けねばならない。そうでないと研究自体が意味を失っていく。その意味でCOE研究は大きなチャンスを与えてくれた、と言えないことはないですよね。評論家的な研究になりかねない。しかし評論家的、言い換えればディレッタント的であることは、むしろ大いに結構なことであり、悪いことじゃない。大学の研究者が自分の専門分野を持っているのは当たり前ですよね。当たり前のことだから、それだけをやったのでは共同研究にならない。そこを突破する可能性を持つことで、研究が開かれる。これは本当のチャンスであり、こういう場でしかできないだろう、という気がします。

（2007年4月20日　於COE共同研究室　聞き手：香月洋一郎　記録：彭偉文　※なお本文中の図は編集部が選んだものである）

Interview 3

1班 『日本近世・近代生活絵引』の編纂班代表者　田島先生に聞く

絵引作業の舞台裏

Some Additions to My Report in the Last Issue

田島　佳也（神奈川大学日本常民文化研究所　教授／事業推進担当者）
TAJIMA Yoshiya

ニューズレターの前号、16号の特集では全ページの三分の二ほどを割いて『日本近世生活絵引』の作成作業について紹介しました。そのことについての若干の補足、手の内、ため息など、特集の責任者の田島先生に語ってもらいました。

―前号であたらしい『絵引』作成について書いていただきましたが、いわばその舞台裏、あるいは作業の手の内について少し…。

田島　私の専攻は日本経済史ですが、経済史的観点から「農業図絵」を意識してみたことはあまりないですね。例えば犂や鍬とかが描かれていますが。恥ずかしいですが、全くと言ってよいくらい農業経済については無知で。

例えば、「江指浜鰊漁之図」はニシン漁業図が中心で、ニシン漁業についてはこれまで研究してきているので。近世の漁具や運搬船は、こういう形をしていたのかなど、今まで文献に書いてあったことが具体的に絵に描かれていて、あっ、鰊網はこういうふうに浜に引き上げているのか、近代とはちょっと違うかなとか、そういうところは何となく解るわけです。ところが、北陸の農村をフィールドとして自分で調査・研究しているわけではなく、「農業図絵」の場合は、描かれている北陸のこと、そこでの農業のことが全く解らない。そうすると、単純に絵を切り取り、番号をつける。これは何か、名称は、とか、そういう単純作業をしているという意識の方が強いですね。

「江指浜鰊漁之図」の場合は、むしろ自分の研究フィールドにしている所でもあるので関心が高い。江差の地形からみたら、神社や商店などが何でこっちに向いているのかな？とかね。江差には学生時代から何回も通い、海岸に産業道路が造られて海辺の景観が完全に変わる前から、江差浜辺りの景観、街並みなどを知っていますから。そうだと、この辺りは妙にデフォルメされているな、このようなところに神社が描かれているが、ちょっと変だな、とか疑問を感じるのだが、全くそういう認識が無いと、疑問にも思わず、もう単純に『絵引』の作業をしてしまうところがあります。

―絵の中のリアリティと現実の中のリアリティとは必ずしも対応しないと思いますが。

田島　それはそうですが、やはり『絵引』を作る場合は自分の持っている現実のイメージを投影させてしまいがちになりますよ。そしてそれから考え、文献などを調べて、これはこういうことなのかな、と。文献の説明と違っているから、近世では形も使い方も異なっていたのかなとか、そうしたことを思いめぐらしながら、ある程度のことは解る。けれどもそれを専門的に研究しているのか、していないのか、というのが重要な要素として『絵引』の研究と作成にはあると思うんですよ。

絵を切り取って名称をつける時に、これは何なのだ、とか。名称をつける場合には、1班ではなるべくその時代の言われ方をできるだけ復元しようと決めました、難しいんですが。地域の個性も大事にしたい。正確に名称をつけるのが大切であるということは解るはずです。澁澤先生が作成した『絵巻物による日本常民生活絵引』でも、確かに全部が専門家ばかりではありませんが、民俗学とか農業社会学、経済史、それに模写をする絵師など、それなりの研究をしている人たちが集まって、意見をぶつけあいながら進めた。現在のCOEの『絵引』班では、メンバーの皆が集まって作業をし、議論をしたことがありませんから。

ただ、澁澤先生たちの『絵引』作成では、何人かが研究所の部屋に集まって、議論をしながら切り取った絵の個々の箇所に番号を付け、名称を付けていったといわれています。毎日、研究会や作業を行っているわけではないが、集まったときにそれぞれのメンバーが自分たちの調べてきた事実をお互い突き合わせて検討している。そういう意味では、ほとんどそういうことを1班のなかでは行っていませんからね。ただ、1班のなかの福田アジオ先生の班、『東海道名所図会』から『絵引』を作る班では中村ひろ子先生と富澤達三さんを協力者に頼んで、集中的に研究している。ただ、『東海道名所図会』は大体、対象や地域が違っていても同じパターンの絵が多いですね。その意味では『農業図絵』などとはかなり異なるのではないか、と思いますよ。それに、『東海道名所図会』の場合は、図会の上にかなり詳細な説明文がついていて、理解の、また説明文を付けるときの助けになっていますよね。

—『名所図会』自体が、ある類型的発想というか、類型的発想が現れる時代性を反映しているということですね。

田島　『名所図会』とはこういうものであるという型で出版されていますから。だから、各地域の『名所図会』が出版されても、パターンが同じになるのは当たり前です。

—そのなかで、リアリティをどんな風に洗い出すのか、ということですね。そうすると、中世のものよりも、ある意味で、複雑になりますよね。

田島　なるけれど、それがどれほどのリアリティを表現しているのかということになると、ちょっと僕には手に負えない。『江戸名所図会』を見ていくと、女性が歩いていても、その女性が「浮世絵」に出てくる女性のように描かれているところがたくさんあります。本当に、庶民の女性がこのような格好をして歩いていたのか。『農業図絵』などを見ると、金沢城下などの女性や庶民の姿を描いた絵は、『江戸名所図会』のそれとはかなり違います。着る物やほかの物には『江戸名所図会』よりも、リアリティがある。各地の『名所図会』に描かれている人物、とりわけ女性は「浮世絵」にみられるような描き方で描かれている。『名所図会』自体は、人々に地域を知らしめる観光宣伝手段みたいなものですから。

私だって漁労をしたことがないので、「江指浜鰊漁之図」を見て、果たしてそれが本当かどうか、軽々しく言えないわけですよ。そういう意味では1班メンバーは素人集団に等しいのだけれども、ただ文献などで多少の知識を持っている者と、全く持っていない者、現地に行った地理感のある者と無い者、そういった人たちが一堂に会して議論しあうことが大切で、図絵の分析には必要なことです。だからこそ、いろいろな専門分野の人たちに加わってもらい、多くの知恵を絞り出してもらわないといけない。その知恵を結集し、新しい発想と知識を披露してもらい、積み上げて行く作業場が本来のCOEのあり方ではないかと思うのです。4年間、公的資金と大学の援助金をもらっていますから。他班のことも解りづらいですが、1班としてのまとまった動きは決して活発ではないです。メンバーの皆がかなりのハードワークを強いられているということもありますが、お互いに勉強し、啓発しあうという実務的集まりは多くない。そうだと、勢い皆、自分の知っている知識や調べた史資料で『絵引』を作り上げていかざるを得ない。あるいは、せいぜい発表会を計画し、発表して皆に批判を乞うしかない、ということだけになりがちで。どうも達成感が少ない。それで終わってしまう。

—いくつかの矛盾をかかえる中で、どのレベルまでやるかと考えはじめると、根本的な批判も出るんでしょうね。

田島　非文字資料を誰にでも分かるように記号化し、言葉で書き換えていくというのは、ある意味で邪道かも知れない。それは、今まで絵画の専門家がお前ら素人には分からない、分かるわけがないと言っていた部分、すなわち非文字の部分を文字化するという形で、ひとつはデータベース化するとか、ひとつは『絵引』を作るとか、あるいは音楽や映像を意味付けしていく作業は、今まではその道の専門家とか、あるいはマニアックな方たちが素人には解らないといって排除してきた部分を積極的に取り込んでしまうとか、誰もが皆、使えるようにするという意図では、COEの課題はすごく有意義な課題ですよ。もうひとつは、今まで国際シンポジウムを開催して、招聘した外国の先生方からコメントをもらい、リップサービスかもしれないが、神奈川大学COEの試みのひとつである『絵引』作りっておもしろい、と評価してもらい、加えて外国にある図絵からも『絵引』を作り、比較することで日本と外国の習慣や服装などの擦り合わせができ、お互いの国の民族文化の相互理解に役立つ、だから外国物の『絵引』も作ったらといわれました。そうすること

で『絵引』は世界の、人類の共有財産になっていく、と。だとしたら、『絵引』作りはより一層、正確性を求められるけれども、ある程度、共通認識として人類が共有できる作品でもあり、大いに意味があると思っています。そういうことはメンバーがお互い、大体、同意事項として持っていると思いますよ。では、実際にどうするのか。結局、作業をやる個人に押し付けられるというか、その人の責任みたいになっている。

大学の先生方というのは皆、わがままな存在だから。プロジェクト研究の場合、相当カリスマ的な人がリーダーに立って、ある程度見通しをもって、皆を引っ張っていかないと、特に文系の場合の研究は難しいでしょう。神奈川大学COEを例に言えば、各班との交流、連携が希薄ですね。COEの全体会議や全体研究会で発表されるまで調査・研究過程が分からないのですよ、結果しか。それから同じ班のなかでもお互いが調べたことや知っている知識を披露し、議論し合うことが大事ではないか、と思います。おそらく澁澤先生の『絵引』作りの時には、月1回くらいはコンスタントに行っていたと思います。

もうひとつ、教員は大学の公務などでほとんど動けないので、もっと斬新、かつ柔軟な発想を持つ若手研究者に自由にCOE研究を推進してもらう方が良かったのではないか、と思っています。

—具体的な批判をすると、根本的な矛盾にいくのでしょうが、現場ではどう微調整していくのか…。

田島　実はこのCOEプログラムが始まる時に、1班の会議のなかで、『絵引』を作るとしたら自分では何ができるか、という話をしました。自分の案としては、神奈川大学日本常民文化研究所（以下、常民研と略）との関わりもあり、自分の研究とも関わりがある、全国的にかなり残っている漁業作業図や漁業「絵馬」、「絵図」を集めて、そこから図絵を切り取って、地域ごとの特徴を引き出した漁業編の『絵引』を作ろう、という計画書を出したことがあります。

だが、それは『産業絵図』であって『生活絵引』ではありませんと。そんなことはない、これだって生活そのものだといったのですが、結局、賛同を得られませんでした。『農業図絵』だと何でよいのか、という明確な答えはなかったように記憶しています。土屋又三郎の『農業図絵』を使うにあたって、はじめは常民研に『農業図絵』の類本、『耕稼春秋』（八、九、十）があるのだから利用しない手はない、それに常民研所蔵本を使えば、使用に当たっての著作権の問題も生じないと。私も常民研の所員ですけれども、所蔵されている『耕稼春秋』をきちっと見たことがなかったのです。いわれてから見たら、絵に省略されている部分がずいぶん多く、『絵引』の対象史料としては不向きだ、と判りました。それで、『農業図絵』を底本として使うことになったのです。だけど、それでは著作権問題が生じ、クレームも来るだろうと。しかしこれまで、困ったね、というだけで、そこの調整は全然手が付けられて来なかったのです。結局、北海道班を担当していただいている菊池勇夫先生も私も、途中では著作権問題で板挟みになってしまって…。現在も続いていますが…。

COEのプロジェクトは最初、いろいろ自分にとって多くの未知なるものが学べるプロジェクトかな、新しい可能性を得ることができるかな、と大きな期待を持っていたのですが。途中でプロジェクトから抜けた人は賢かったと思いますよ。私自身、ほとんど自分の研究が挫折した状態で…。班の課題遂行に、こちらから是非といって加わってもらった菊池先生はじめ他大学の先生方には大変申し訳ないことをした、と反省しています。大学外部から加わってもらった先生方のほうが熱心に、しかも義務感をもって研究を遂行していただいていますから。

ただ、COEみたいに各班に分散化してしまうと、逆に今度は他の班の相手が見えなくなる。その調査・研究の難しい過程までは知り得ない。COEプログラムが解散すると、研究者各人が時間と費用をかけて会得したノウハウは霧散してしまう危険性がありますね。

—せめて、どんなところがまずかったのかということを含めてその記録は残すべきだとは思うんですけど…。

田島　COEが始まって2年目で見直しをする、現状を踏まえて新たに統廃合する、と聞いていましたが、抜本的改革は不十分でしたね。それがこれまで同じように来てしまった原因ではないか、と思います。じゃあ、お前は色々文句いっているが、どれほどのことをやってきたのだ、と言われたらぐうの音もでませんが…。愚痴を言わせてもらいましたが、大局的にはCOEのお陰で新しい挑戦的な勉強・研究をさせて貰いました。リーダーはじめ、メンバーとスタッフの皆さんには感謝しています。

（2007年4月23日　於COE共同研究室　聞き手：香月洋一郎　記録：國弘暁子）

都市景観「いにしえのソウル」の復元
The Restoration of Seoul's Landscape

冨井　正憲（神奈川大学工学部建築学科　助教／共同研究員）　TOMII Masanori

近年韓国の首都ソウルは都市の歴史的な景観を復元する大きなプロジェクトが盛んに行われている。

1990年代からソウル600年の記念事業としてスタートした景福宮をはじめとする朝鮮王朝時代の王宮群の修理と復元が継続して行われてきている。

また一昨年（2005年6月）には都市の中央を西から東に流れる清渓川の復元が完成し、内外で大きな話題となった。わが国でも似た状況にある東京日本橋の高架道路の取壊しが取り沙汰されたことは記憶に新しい。1960年代に相当汚れていた川を暗渠にして道路を新設し、さらにその上に高架道路を建設して近代化を推し進めてきた市街中心地を、2000年代に入ってから、前ソウル市長が選挙の公約通りにこれらの道路を全て壊し、もとの川を復元して美しい水を流すようにした。昔あった橋の位置には現代的な橋が1つ1つ丁寧にデザインされ、川の両側には遊歩道が設けられ、昔同様の親水空間が再生されて、市民の憩いの場所となっている。

川ばかりでなく、全長18kmの長さで囲まれた城郭も可能な限り城壁や門を修復復元して昔の姿を忠実に取り戻すように計画検討中である。

また景福宮の東隣に位置する北村地域は早くから歴史的な都市住宅群の保存地域として指定されてきたが、昨今はその伝統的な雰囲気を生かしてギャラリー、飲食、宿泊の施設にリニューアルして若者や観光客に人気を博し、都市の活性化に一役担っている。

こうした都市景観の保存、再生、復元の動きの中でもっとも興味を惹くのが2009年末の完工をめざして現在進捗中の光化門の復元工事である。光化門は景福宮の正面門であり、王宮の門の中でも最も重要な門であるが、建設されてからこれまでに幾度かの歴史的被害を被ってきている。

最初が1592年の豊臣秀吉の文禄慶長の役による焼失である。その後1867年に再建されたが、植民地時代の1915年に光化門のすぐ後ろの王宮敷地内に総督府庁舎の計画建設が開始されたときに、その正面に位置する光化門の存在が障害となり、門の取壊しが発表された。これに対して柳宗悦が1922年（大正11年）雑誌『改造』9月号に「失われんとする一朝鮮建築のために」の有名な一文を発表し、光化門の取壊しに断固反対した。その運動の甲斐あって、門は総督府完成後の1927年に景福宮の東に移築された。

こうして一旦は取壊しの難から免れた光化門であったが、再び朝鮮戦争の時に2階の木造楼閣部分が破壊され、一層目の石造部分のみが残った。その後1960年代に入ってから元あった場所に再び移転復元する話が持ち上がり、実際に1968年に再建なって、今日まで存続してきた。

さて、せっかく復元され、今日まできた光化門が今回またわざわざ取壊されて、再々度の修復復元工事が開始されたのは何故であろうか。その理由を詳しく調べてみると、オリジナルな門と1968年に復元した門とのあいだには重要な相違点があり、今回はその違いを修正して、創建時の門と同じものを復元することが大きな目的であった。具体的な違いのひとつは、現在の門の位置と向きがオリジナルと大きく異なっており、元に戻すためには現在の場所より南に14.5m、西に10.9m移動し、かつ向きを時計回りに5、6度戻すことである。門の位置と向きの違いが生じた原因は、総督府を建設するときに元々の宮殿の配置軸から振って計画したためである。その振った理由を当時の設計関係者は、光化門通り（現世宗路）のもともと「くの字」に曲がっていた道路形状を真っ直ぐに拡張修正したためと書いているが、研究者はその説明に納得しない。総督府を朝鮮神宮が設けられた南山に正対面する様にしたためとか、あるいは王宮のすでにあった配置軸から意識的に外して、朝鮮王朝の風水の気から免れる配慮をしたためとの興味ある見解を挙げている。

違いのもうひとつは、現在の光化門がコンクリート造であるために、これを本来の一層部分を石造に、2層部分を木造に戻すことである。遠目では気がつかなかったが実際に取壊しの現場に立ち会ってみると、細かな斗供や欄干までが精巧にコンクリートで製作され、かつ色彩が

施されており、その出来栄えには感心した。そのときに、この1960年代に再建したコンクリートの光化門が日本の技術で建設されたことを教えられ、またまた驚いた。確かに、当時の日本では寺社の建設に火に強いコンクリート造の工法が広まっていた時期で、2度の戦火に見舞われた光化門も早速その技術を取り入れたのであろう。

この復元工事にあわせて、光化門の前には来年の8月までに光化門広場が出現する。現在16車線ある広い幅員を持つ世宗路を10車線に縮小し、中央に幅27m、長さ500mのグリーンベルトの広場を新設する計画が最近発表された。完成すると北は遠く北漢山を望み、南は南山のソウルタワーを眺めることとなる。この南北の景観軸をもつ公園は既に復元なった東西に走る清渓川と直行することになり、一層ダイナミックな都市景観が誕生することになる。

1960年代に再建したコンクリート造の光化門と旧総督府庁舎（前　国立中央博物館）

光化門のない1930年代の景福宮と太平路一帯の鳥瞰写真

こうした動きは朝鮮王朝の建築だけではない。近代に入ってから建てられた建築にも積極的である。日本の統治時代の建築では旧朝鮮銀行（現貨幣金融博物館）、京城駅（現鉄道博物館）、西大門刑務所（現西大門刑務所歴史館）が古くから保存されてきたが、昨今では旧大法院のファサードを再利用したソウル市立美術館、旧明治座の外観をそっくり生かしての現明洞芸術劇場、漢江の中洲に浮かぶ旧下水処理場を改造しての仙遊島公園、それに最近ようやく決定したソウル新市庁舎においても旧京城府庁舎をそのまま横に残す保存案で建設に入った。植民地支配の象徴的な存在であった旧総督府庁舎が取壊された時期からさして時間が経っていないが、大変な違いである。因みに光化門移転の直接的原因となった旧総督府の建物は戦後中央庁、国立中央博物館として長い間使用され、保存賛否大議論の末に1995年8月に取壊された。現在、その尖塔部分は天安の独立記念館横の公園でみることができる。

以上のような日本統治時代の負の遺産をも抱き込んでの記憶の継承としての大規模な復元計画が着々と進んでいる背景には、ソウルを歴史都市としてユネスコの世界文化遺産に登録したいという戦略が見え隠れする。これまでのソウルにおける世界遺産は、朝鮮王朝の歴代の国王と王妃を祭る宗廟と、奥に秘苑という美しい庭園をもつ昌徳宮のわずか2つだけであった。今後これに清渓川、宮殿群、城郭、城門、歴史的地域、歴史建造物等の保存、再生、復元が新たに加わり、歴史都市造成計画が大々的に展開すれば、北の山を背にし、南の川に面し、4つの山に囲まれた背山臨川4局の形象をもつ、世界にもまれな風水都市の「いにしえのソウル」の景観が、歴史都市として世界遺産に登録される日もそう遠くはないであろう。

文久2年の「はしか絵」

Some Pictures,“ Hashika-e ”from 1862 as Historical Materials

富澤　達三（葛飾区郷土と天文の博物館　専門調査員／COE調査研究協力者）
TOMIZAWA Tatsuzo

1 あなどれない麻疹

今年、関東地方では若い世代に麻疹が大流行した。4月半ばから5月半ばにかけて、日本大学・上智大学・早稲田大学などで麻疹による休校が相次ぎ、大ニュースとなった。麻疹ウイルスに感染すると約9割が発症するという。約10日の潜伏期を経て、風邪に似た症状ののち38度を超える高熱が出て、赤い発疹が全身に出る。発病すると特効薬はなく、対症療法をしつつ自然治癒を待つしかない。まれに脳炎や肺炎を併発し、重篤化する。

江戸時代には「疱瘡（天然痘）は見目定め、麻疹は命定め」（天然痘は顔にあばたが残り容貌にかかわる。麻疹は命にかかわる。）といわれ、麻疹は20～30年の周期で流行した。特に幕末の文久2年（1862）には多くの死者を出している。斎藤月岑の『武江年表』によれば、文久2年2月に長崎港の西洋船で麻疹 の患者が発生し、3～4月には京都・大坂へ伝染し、江戸でも4月に中国地方の旅から帰った小石川某寺の僧が発症して広まったという。『藤岡屋日記』では、文久2年6～8月にかけて、江戸での麻疹による死者は14,000人を越えたと記している。

文久2年の「はしか絵」（歌川芳藤画『麻疹送出シの図』）

2 文久2年の「はしか絵」

文久2年の夏、江戸では麻疹の流行を題材とする時事錦絵「はしか絵」が出版され、現在まで約90点が確認されている。幕末江戸の時事錦絵としては、安政2年（1855）10月の安政江戸地震後に出版された「鯰絵」が有名だが、版元・絵師が不明で無検閲の鯰絵と違い、はしか絵は絵師・版元・改印（検閲年月を示す印）の判明する作品が多い。絵師は作品の多い順に、歌川芳虎・芳盛・芳藤・芳艶・芳幾などとなっている。版元は新興の地本問屋（草双紙・錦絵など、娯楽的出版物の制作・販売業者）が目立つ。改印は「戌四」「戌七」（文久2年4月・7月）の二種にほぼ限られる。版形は大錦（現在のB4版に近い大きさ）の竪絵が多い。

3 はしか絵の絵柄

はしか絵の絵柄は、以下の7つに大別できる。そして、それらを組み合わせて、人目をひき「麻疹除け」と「治療に役立つ」はしか絵が生み出されていった。

①麻疹退治を描いたもの

麻疹をもたらす「麻疹神」を抑える効果のある食物や器物・神々が、麻疹神を退治したり、送り出す絵柄である。また、麻疹の流行で「商売あがったり」となった人々が、麻疹神を集団で殴る絵柄もある。

②神・英雄などへの祈願を描いたもの

鍾馗・源為朝・半田稲荷の願人坊主・くくり猿などの絵柄である。鍾馗は、中国で疫病を払う神として信仰され、現代日本でも端午の節句に鍾馗の絵を飾る風習が残っている。源為朝は平安時代末の武将で、保元の乱（1156

年）で敗れ、伊豆大島を経て八丈島に流罪となった。彼の強い肉体と武力は、疫病神すら退散させたという。源為朝は、疱瘡除けと治癒を願う「疱瘡絵」の代表的絵柄だが、疱瘡と同様に発疹を伴う病である麻疹への効力が期待され、はしか絵にも描かれたのだろう。半田稲荷の願人坊主は、疱瘡・麻疹に効く稲荷として信仰を集めた半田稲荷（現、東京都葛飾区）を宣伝した、下級の宗教者である。疱瘡や麻疹除けに効果があるとされた赤色の装束を着て、手には幟や鈴を持っていた。くくり猿は、子供の災厄が「去る」ように願った猿のぬいぐるみである。これらの絵を持っているだけで麻疹よけとなり、罹っても軽く済むと信じられた。

③麻疹除けのまじないを描いたもの

当時、麻疹除けに効果があると信じられていたまじない（麻疹除けの歌を書いたタラヨウの葉・馬の飼葉桶をかぶる様子・達磨など）の絵柄。まじない方法を教え、絵が麻疹除けになると信じられた。

④麻疹に良い食物・悪い食物を描いたもの

麻疹の際に食べて良い食物・悪い食物を描く。

⑤養生する人々を描いたもの

麻疹療養中の歌舞伎役者、母と子、若い女性などの絵柄である。麻疹から回復しつつある者、治って元気になった者たちの絵柄は、養生の大切さを感じさせ、見る者に希望を与えたと考えられる。

⑥三すくみで時事を諷刺したもの／⑦諷刺戯画

麻疹で損をした人・得をした人（薬屋・医者）、麻疹神や疱瘡神、麻疹が治った人などが三人で話す場面・拳遊びをする姿などを描いている。「三すくみ」で、膠着した状況・三者三様の場面を描くことで、麻疹が大流行する江戸での、人々の利害関係や悲喜こもごもの姿を諷刺している。ほかに歌舞伎の名場面に取材した戯画的な作品もある。江戸庶民は、麻疹で混乱する江戸の様子をちゃかしたはしか絵を見て、つらい世相を笑い飛ばすことで自らを励まし、はやり病の終結を祈ったのだろう。

4 はしか絵の文字情報

多くのはしか絵では、絵の周囲に長い文章が書かれている。文字情報も5つの類型に分けることができる。絵柄同様にいくつかの類型を組み合わせ、麻疹除け・治療と養生の情報を伝えている。

A.麻疹除けの歌・まじない

麻疹除けのまじない（「麦殿は生れたままに、はしかして、かせたるのちハ我ミなりけり」など）をタラヨウの葉に刻んで書いて川に流す・馬の飼葉桶をかぶる・豆や雑穀を混ぜて煎じる、などの呪法が書かれる。

B.麻疹の食事療法・禁忌

当時の医学書や、民間の医療知識に基づき、麻疹の際に食べて良い食物と悪い食物、慎むべき行為を記す。全てのはしか絵を検討した結果、良い食物は「あづき・いんげん・かんぴょう・大根・長芋・にんじん・ゆり根」が、悪い食物・慎むべき行為には「酒・からいもの・性行為・入湯・灸・髪月代・髪結い」が多く書かれている。

C.麻疹の病状経過

麻疹の病状経過の概略を記す。発病から12日ほどで快方に向かうとしたものが多く、発病から回復後の養生まで75日間かかるとし、回復後の養生が重要だと説く。

D.過去の流行年

文久2年以前の、麻疹大流行の年を列挙している。

E.小噺・戯れ歌

笑いを誘う戯文や小噺。暗い世相を笑い飛ばして人々を明るい気分にさせ、麻疹退散を願い、勇気づけている。

5 はしか絵の変化

文久2年4月改印のはしか絵の絵柄は「①麻疹退治」「②神・英雄などへの祈願」が多く、文字情報では「A.麻疹除けの歌・まじない」などの呪術と「B.麻疹の食事療法・禁忌」「C.麻疹の病状経過」が多い。版元たちは江戸での麻疹大流行を予想し、4月改印の麻疹流行期のはしか絵には、麻疹除けとなる呪術的絵柄と、麻疹に良い食物・悪い食物・慎むべき行為に関する合理的な治療情報を載せたと考えられる。

ところが7月改印のはしか絵では、4月改印のものと比べ、呪術的な絵柄と文字情報は減る。8月頃には江戸の麻疹もピークを過ぎ、版元は「回復後の養生」を勧める絵柄と文字情報を載せたはしか絵へ、内容を変えたと考えられる。また、版元は江戸の人々が麻疹を克服した状況を見て、諷刺的・戯画的なはしか絵を楽しむ余裕が生じたことを察し、7月改印のはしか絵には時事諷刺的・戯画的な面を加味している。

はしか絵は、江戸庶民の日常生活を脅かす大事件に対応して、事件の情報を図像と文字情報で継続的に伝えただけでなく、民俗的知識やまじない・医療情報をも教えた時事錦絵であった。幕府は「当節柄之事」を出版物とし、不特定多数の人々に伝えることを堅く禁じていたが、はしか絵は江戸の麻疹騒ぎを沈静する有用な情報だと判断し、出版を黙認したのだろう。

コラム Column

鳥取県において民具調査を始めて

樫村　賢二（鳥取県総務部総務課県史編さん室　学芸員／2005・2006年度COE研究員・PD）　KASHIMURA Kenji

非文字資料の一つに民具がある。その民具に6年近く触れたり、調査したりする機会がなく、民具について考えることがあまりなかった。しかし、平成19年2月より鳥取県史編さん室（平成18年4月設置）に民俗担当として着任し、鳥取県内の博物館、資料館の収蔵する民具を見て回る機会を得た。『新鳥取県史』では急速に失いつつある民俗と同様に民具を重要視しており、「民俗編」とは別に独立した1冊として「民具編」の刊行を目指している。県史編さん事業で「民具編」を編さんするという事例を知らないため、どのようなものにするか構想に悩むところであるが、構想しようにも鳥取県内の博物館、資料館等が民具・民俗資料をどのようなものをどのくらい所蔵しているのか、全く分からないというのが現状であった。まず市町村の教育委員会に電話で問い合わせを行ったが、民俗資料について目録や台帳が作成されていることが稀であり、所蔵資料について大まかにも把握できるような現状にないことがわかった。

とりあえず鳥取県内の資料館を見て歩き、担当者からの聞き取り調査を開始した。これまで約20の資料館等を調査し、調査の過程において、博物館や資料館以外の場所、例えば多くの小学校等にも民具が集められていることも判明した。はっきりと資料館とは銘打っていないにしても、民具を残したいがために小学校や公民館、倉庫などに保管している市町村がほとんどであるが、保管しているだけで今後の活用や資料の公開までは及んでいないというのが実状である。とりあえずは消失を逃れ、保存されている民具の総数は相当なものとなるだろう。また、これらの民具は収集保存に携わった人、寄贈者が不明であることが多くモノはあるがデータがないことが多い。民具の使用方法は文献や古老からの聞き取りである程度は判明するが、いつ誰が製作し、誰が使用したか、どこで使用したかほとんどわからない。民具資料は製作者や使用者からの情報を得られない現状からすれば、モノ自体から情報を引き出す必要が高まっており、そうした意味で地中から掘り出されたものではないにしても考古資料に近づきつつある。

しかし諦めるのはまだ早く、民具を傍らに古老が語ればある程度の情報を聞き出すことも可能である。鳥取県という限定された地域ではあるが、この県史編さん事業を通じて、民具に添えて少しでも多くの古老の言葉を資料として後世に残すことを目指している。しかし、すでに直接の製作者、使用者が存命であることが少ないのも事実である。そのためにどのように使用するかを知るために有効な写真、映像資料などの非文字資料、そして文字資料も併せて収集していこうと考えている。すでに失われた技術を知るにはモノ自体に情報を求めると同時に、様々な非文字資料と文字資料を重ねなくてはならないのが現在の民具研究である。

悲観的な状況を述べたが、今までの調査においては新しい出会いがあった。果樹生産とその生産用具との出会いである。鳥取県には鳥取二十世紀梨記念館という梨をテーマとした展示施設があり、梨に関する歴史や産業の情報を紹介している。鳥取県は梨、特に二十世紀梨の一大産地であり、養蚕経営が厳しくなって以降、それに取って代わって大きな収入源として農家を支えてきた重要な産業である。その生産用具は多くが梨生産以前からの農具を活用し、改良しており、梨以前、以後は分断されるものではない。また園芸技術の改良や共有のために記録写真が大量に残されており、これも合わせればさらに貴重な資料群となる。しかし明治37（1904）年に鳥取県に二十世紀梨が初めて入り、すでに100年以上が経過しているにもかかわらず、現在進行中の産業の資料、特に民具にはあまり注目が集まらない。養蚕のように一度盛隆を極めて衰退して初めて注目が集まり、資料保存とかつての姿の調査が始まるという悪循環が繰り返される可能性がある。現在進行中の産業の記録を今から収集し、人々の生活を記録化することは重要である。時代が進み希少化することや研究成果が上がるのを待っていては遅い。実験的な試みになるが近代以降、現代の民具を発見し、それを後世に伝えるべき資料とすることに挑みたい。

鳥取二十世紀梨記念館の展示品

コラム Column

「家族」と「故郷」

吴 毓華（浙江工商大学日本語言文化学院教員（助手）） WU Yuhua

「お帰りなさい」、横浜駅まで迎えに来た「お父さん」は私の荷物をトランクに入れながら言った。「ああ！ただいま」、突然のことに一瞬頭の中がカラになった私は、車に乗りこんでからそう返した。「もう一年半近く会えなかったとは思えないね。吴さんは横浜の人で、暫く外国へ行って、帰ってきたという気がするね。だから、“いらっしゃい”より“お帰りなさい”のほうがいいかな。」お父さんは運転しながら、そう説明してくれた。

実はお父さんは以前住んだアパートの大家さんである。日本語の第二人称代名詞は複雑で、外国人にとってはとても使いにくい。お父さんは70代だが、まだ毎日東京に通い会社を経営している。お父さんを「あなた様」と呼ぶのはなんか変で、苗字で呼ぶのもなんとなく距離感を感じるから嫌だ。「お爺さん」も年を感じさせるから嫌なので、残りは「お父さん」しかない。

外国語を使う時、意味が分かっても、感情が入らない場合がある。例えば、「I love you」や「吴さんのことが好きだよ」で告白されたら嬉しいけど、いったい相手がどんな気持ちで言っているのかがあまり実感できない。逆に母国語で言われると、なんとなく想像できる。最初に「お父さん」と呼ぶ時もそんな気持ちだった。ただ一つの呼び方だと思っていた。それで、大家さんの奥さんのことを「奥さん」と呼んだ。

お父さんと奥さんは本当にいい人である。実は友達の紹介で部屋を借りに行った時は、まだ横浜国立大学の学生寮に住んでいたが、お父さんは部屋を半年程空けたまま待ってくれ、入居後、足りない家具と電気製品は全部リサイクル屋で買ってくれた。私がまだ古い小型のテレビを使っていることが分かった翌日、お父さんはリサイクル屋でちょっと壊れた29インチの2002年製のテレビを買ってきて、自分で修理してから私にくれた。美味しい店があれば、お父さんはいつも「日本の味を味わいなさい」と奥さんと私を食事に連れて行ってくれたものだった。

またある時は、生活用品だけではなく、お父さんは色々な専門書を買ってくれたり、古本屋で120冊の日本文学全集を買い、古びた本に全部白い紙でカバーを作ってくれたりした。私が茶道を習いたいと言ったら、お茶の先生を紹介してくれて、毎週先生の家まで通えるようになった。お父さんはいくつもの店でお茶の道具について色々と教えてくれ、私が帰国してもお茶の稽古が続けられるように、お風炉、お釜、茶碗などの道具まで揃えてくれたのだった。

とうとう帰国の日が来た。出発は早朝5時だったが、お父さんと奥さんは4時半にはもう起きていた。3月の末なので周りはまだ暗い。最後の一ヶ月、私はいろいろな人とのお別れ会や、荷物の整理などで忙しく、もうすぐ日本を離れると分かっていても、悲しんでいる時間はなかった。最後の荷物もとうとうタクシーに積んで、最後に一目、二年半住んだアパートを見ようとした時、突然胸が熱くなって、涙がぽろぽろこぼれてきた。奥さんは私をしっかり抱きしめ、泣きそうな声で「吴さん、帰ってから、仕事をちゃんとしてね」と言った。「吴さんに、さようならなどは言いたくない。吴さんはただ暫く中国にお嫁にいくみたいなだけだよ、いつでも帰ってきてね。待っているからね」とお父さんは私のそばでにこにこしながらそう言った。私は「お父さん、いろいろ本当にありがとうございます」と深くお辞儀をしながら言った。その瞬間、「お父さん」はもうただの呼び方ではなく、心の底からこの人は私の本当の「お父さん」であることを実感した。

『広辞苑』の「家族」という単語に「夫婦の配偶関係や親子・兄弟などの血縁関係によって結ばれた親族関係を基礎にして成立する小集団」とある。しかし、私はお父さんと奥さんに接して、お互いに心を開き、気持ちを通わせれば、すぐ「家族」になれることがわかってきた。同じように、生まれたところだけが「故郷」ではなく、「家族」がいっぱいいれば、そこが「故郷」になる。だから、「お父さん」と「奥さん」はもう既に私の第二の「家族」で、横浜は第二の「故郷」になる。

先日「恩返し」という単語を中国の学生に教えた。日本にいた間、私はいろいろな日本の方々から優しくされて、感動したことがたくさんある。私はその感動を中国の学生に伝え、日本文化や文学を正直に紹介し、日本を正しく理解してもらえるように頑張りたい。それに、中国で出会った日本の方々に優しくしたい。彼らも中国を第二の故郷と思ってくれるように尽力したい。時々それも「恩返し」の一つの形ではないだろうかと思う。

今回は神奈川大学COEの招待で来日することができ、もう一度私の第二の「故郷」に戻って、私の「家族」と会えた。また、今回は福田アジオ先生をはじめCOEの方々にいろいろとお世話になった。私の横浜の「家族」はどんどん増えている。これからも増える一方だろうか。

（吴毓華氏は2006年10月1日～10月14日まで訪問研究員として来日された。）

＊本稿は日本語で執筆されたものを、誌面の都合から編集部で内容を一部割愛したものである。

2006年度
外部評価と対応策

An Auditors Report of Our Project and Our Response to It

本学COEプログラムでは、2007年2月13日に2006年度外部評価を実施しました。今回は、慶應義塾大学文学部　鈴木正崇教授、常磐大学コミュニティ振興学部　水嶋英治教授、東京大学史料編纂所　保立道久所長（当時）の3名を外部評価委員に委嘱し、当日は、拠点リーダーをはじめ関係者が出席して、最終年度に向けた4年目の進捗状況を報告しました。外部評価委員には具体的な問題点を指摘して頂き、後日各氏からは下記のような評価報告書が届けられました。

委員の評価（要旨）

Ⅰ 鈴木　正崇　委員

1. 前年度の評価に対処して、すみやかに対応策を考え、班を再構成したことを高く評価したい。成果も着実に積み重ねられており、他に見られないユニークな研究を総合的に統合し、今後は理論化する道筋がついたと考える。
2. 大学当局の支援が継続的に行われるならば、世界的な研究拠点になる可能性は十分あると思う。具体的には、
   ①日本常民文化研究所所蔵品の常設展示を可能にする博物館の設置
   ②大学院歴史民俗資料学研究科の独立大学院への移行
   ③フィールドワークの実習と報告書を継続できる予算の恒常化
   などといった諸点が挙げられる。神奈川大学が今後の運営にあたり、大学のイメージアップや独自性を打ち出す必要があるが、「非文字研究」の体系化は、大きな推進要因となる。
3. 本プログラムの最大の問題点は、「非文字資料」の研究を、現代という時代において行うことの意義は一体何かという統一的な見解が欠けているように見受けられることである。本研究の基盤は、農村・山村・漁村、職人など第一次産業の社会が主体であり、それらは、過疎化・少子高齢化・農業改革（大規模化・集団化）の中で、急速に崩壊しつつある。こうした社会の文化を、単なる「失われていくもの」として愛惜するのではなく、「人間らしく生きること」「多様な知の形の提示」「もう一つの近代」など、現代へのアンチテーゼとして提示できないか。
4. 情報発信については、ホームページへのアクセス数が少ないという説明であったが、キーワードとして「非文字」を入力できないことが原因であろう。他のキーワードとして表象・身体・図像・声・景観・民具などが考えられる。文字と非文字を対等にみる、あるいは非文字の方がより大きな可能性を持ち、21世紀の大きな課題となるという方向に関心が向けば面白い。海外への発信については、グローバルな対話ができるような用語を考えることが望ましい。
5. 「非文字」non-writtenでは馴染みがない。無形遺産 intangible heritage、非言語コミュニケーション non-verbal communicationなど、流通している概念との接合を考えて、議論できる土壌を設定する。また、民具・芸能・図像は、ユネスコの「文化的景観」重視の施策の展開、特に世界遺産の認定や「無形遺産」の保護などとも関係が深く、グローバルな視野からのモノとコトの見直しが迫られている。今後、世界遺産の認定への継続審議となった地域に関しても、求められれば助言ができよう。
6. 各班に共通する主題を鮮明化するようなシンポジウムを企画することも一つの案である。例えば、「身体」をテーマに、哲学・社会学・人類学・宗教学・歴史学・政治学・地理学・舞踏学などの研究者と対話して「非文字」の役割や位置付けを考え直す企画などである。
7. 地域統合情報発信のモデルケースとして只見の事例は期待が大きい。しかし、安易な町おこし、村おこしに飛びつくことなく、21世紀の課題という大きな視野に立って、現実と渡り合う接点を持ち続けることが望ましい。

II 水嶋 英治 委員

1. 非文字資料研究の拠点として
   ①神奈川大学の誇るべき「日本常民文化研究所」はまさに歴史民俗資料学の至極の宝庫であり、世界的に見ても最高水準の研究所である。日本常民文化研究所で蓄積してきた資料を活用して、新たな視点で非文字資料を体系化する試みは、学際的な研究領域であり、同時に極めて複合的な研究領域である。本研究は、新領域の開拓分野であると評価できよう。それゆえに、旧来の発想と方法論では「体系化」という大事業は自ずと限界があり、諸成果の公表についても、これまでにない方法を模索し続ける宿命にある。
   ②例えば、『絵巻物による日本常民生活絵引』でも、「非文字」を文字化する際の危険性についても、注意を促しておかなければならない。非文字資料を資料化する試みは、「文字化」への回帰であり、また現代社会を反映する「図像化」という手段を用いることによって、非文字が非文字であり続ける、というジレンマに陥るという危険性がある。
   ③研究班については、4班から6班編成にしなおして、「理論総括研究」を加えたことは評価できる。まとめの時期に入って、まさに正念場はこの理論化、体系化の部分に重点が移りつつあるのではないか、と予見している。
2. 研究・教育内容の充実と成果
   ①「非文字」というキーワードは研究者を奮い立たせる不思議な魅力がある。しかし、一般人にとっては、非文字という用語は通常思い付かないことばであり、範囲があまりにも幅広く、焦点が定まりにくい。今回の研究では、身体技法・感性、環境・景観などに焦点をカテゴライズしているが、それらの領域がどのように結びつくのか、研究者にとっても理解しにくい。「非文字資料とは何か」という本質的問題とどう関連づけ、全体系としてどのように捉えるかが明瞭に示されていない。
   ②そこで、最終年度である平成19年度は、特に理論総括班の果たす役割は大きく、「資料化」「体系化」「統合化」について一層の努力を要するように思われる。そのためにも課題間または課題内の研究担当者との協議と相互理解、個別研究よりも全体像を把握する努力を怠ってはならないであろう。
   ③また、データベースについては、インターネット上での情報発信は、COE終了後の組織体制や本研究の位置づけが再確認されなければならない。民具などのデータベースの進捗状況については危惧する点もあり、なるべく早く、著作権等の問題を解決して公開を進めていく必要がある。
3. 本研究成果の学術的意義と社会的意義
   ①本プログラムでは調査研究の成果を印刷物として数多く公刊してきた。年報やニューズレターの内容は充実しており、研究の進捗状況が広く紹介されることは、本研究の社会的な意味が生じてくる。
   ②しかし、大部分が日本語のみであり、これらの成果が英文で記載されていれば、さらに学術的価値は高まるであろう。

III 保立 道久 委員

1. 本COEプログラムは、研究プロジェクトとしてきわめて興味深いものであることは衆目の一致するところである。
   本プログラムの興味深い点は、
   ①その民俗学・人類学・歴史学などをおおう学際性にあるといえるだろう。
   ②また、その理論性にあり、とくに川田順造教授の立論は、相当の一般性をもっているといってよい。
   ③このプログラムが民俗学を中心として東アジアにひろげてきた国際的なネットワークにある。
   上述したように、各班の展開している仕事も各々実りがあり、興味深いものである。これらは有用であって、学界にとって利益が多い。それとの関係で、本プログラムの採択とそれに対する神奈川大学の理解ある支援は十分に元が取れているということも確認すべきである。
2. 計画全体の実現には様々な困難が見え、とくに成果を絞り込む点については不十分な点が多いと言わざるをえないことも事実である。せっかくの有益な内容とかけがえのない努力がそのような評価を受けないように、全体をまとめる方向を確認することが必要であろう。問題点としては、

外部評価

①計画調書において約束した情報システムの問題である。これは、「約束」なので、どうしても実現するべき事柄であろう。そもそも情報システムを、本プログラムの中にどのように位置づけるかについて、グループ内部で十分な了解がないのではないかというのが、全体的な疑問である。
出発点は、日本常民文化研究所の日常的な仕事と実績を前提にどのような情報化が必要であり、有用であるか確認することであろう。データベースやシステムの構築は日常的な仕事の中で持ちこんで考えなければならないというのが鉄則である。そのためには、（ア）採訪民具の写真・記録を画像・テキストデータベース化すること、（イ）澁澤写真、『絵巻物による日本常民生活絵引』などの画像資料のデータベース化、（ウ）水産庁採集の漁業史料のフルテキスト化、などといったことを推進する必要があろう。

②本プログラムの全体的なまとまりに欠けることも問題である。それは、学際性、理論性、国際性という本プログラムの長所を、現在の段階でどのように位置づけているかという問題に関わっている。本プログラムにおいては民俗学・人類学・歴史学の相互関係を捉え直すことが基本的な意味をもっているが、もっとも重要なのは、人類学と民俗学の関係であろう。
特に、（ア）東アジアという観点を面に立てた民俗学的な立場からの方法議論がどのように展開されるかは注目すべきことであるだけに、議論が中途で止まっているようにみえるのは残念である。（イ）歴史学における「社会史」の研究は、現在、視角や方法の点で行き詰まりを迎えているが、それを東アジアにおける歴史的な民俗比較という方向に転回する上でも、東アジア民俗学ともいうべき動きの意味は大きい。（ウ）研究班の中での歴史学の位置、方法的な位置が全体としてどうなっているのかが分かりにくい点も気になった。

外部評価に対する対応策

■問題点1＜研究成果とその体系化について＞の対応策

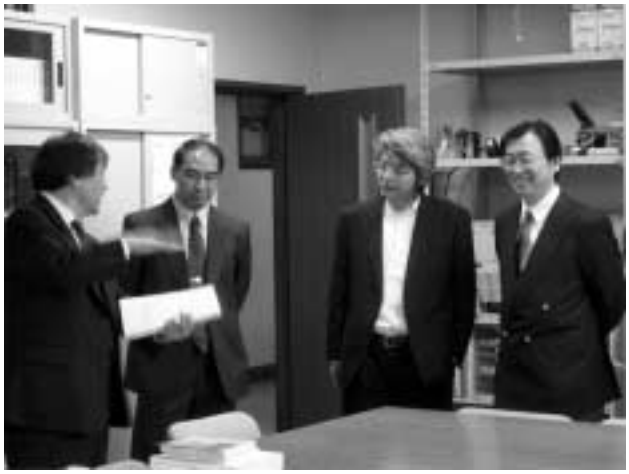
現在、本プログラムでは最終年度を迎え、6班・11課題による研究成果が逐次まとめられつつある。印刷刊行物による研究成果は全部で18冊を予定しており、平成20年3月までにはすべて公刊する運びとなっている。さらに、各班・課題では、収集資料や研究成果の一部をデータベース化して公開することになるが、それらも印刷刊行物と併せて6種類のデータベースを完成させる予定である。こうした成果物は、外部評価委員から一様に高い評価を受けている、前年度の外部評価に対応して平成18年度に行った班再編の効果によってもたらされるものと考えられる。

しかし、評価委員が最も期待される班・課題相互間の研究の「体系化」「統合化」という問題については、現時点においては必ずしも十分な結果が出ているとは言い難い。この点については、理論総括研究班（6班）により、「非文字資料とは何か」という本質に関わる理論的な枠組みの構築とともに、図像、身体技法、環境・景観のこれまでの研究成果を分析し、その上で相互の「体系化」「統合化」を図ることになる。

また、具体的な「体系化」の試みは、地域統合情報発信班（4班）により、福島県只見町をモデルケースとして、山村に生きる人々の営みを統合し、構造的に体系化する。加えて、実験展示班（5班）でも図像、身体技法、環境・景観の三者を展示という方法に統合し、情報発信するという方法を試みることになっている。実験展示のテーマとして「あるく―身体の記憶―」を選定し、本年11月に本学の常民参考室で開催する。

■問題点2＜情報システムの構築と情報発信について＞の対応策

これまでの外部評価で常に弱点の一つとして指摘されてきたのが、収集資料と研究成果を広く公開する情報システムの開発ならびに情報発信に関するものであった。今回の外部評価においても、全委員がインターネット上での情報発信の遅れを指摘している。ホームページのアクセス数の少なさや、海外への情報発信に対してグローバルな会話ができる訳語の再考、採訪民具の写真・記録、澁澤写真などのデータベース化の進捗状況を危惧するなどといった意見が寄せられた。また、情報公開の際の著作権問題についても、すべてをクリアーして公開する必要性を説いている。



こうした問題点に対して、地域統合情報発信班では、他の班・課題の研究成果である図像データベース、モーションキャプチャ分析、景観の経年変化解析などの情報処理・発信法を特定地域において統合し、情報発信することに取り組んでいる。福島県只見町をモデルとして、民間業者と共同してデジタル・コンテンツ化を目指し、インターネット上での情報発信システムを開発することになる。他の班・課題でも収集資料や研究成果のデータベース化を進めている。

また、著作権の問題については、研究担当者の中から3名を選出し、「知的財産権担当」としてその問題に対処するなどの対応策を講じている。

■問題点3＜終了後の拠点構想について＞の対応策

最終年度にあたって、民俗学・人類学・歴史学をはじめ関連諸学の協同によって推進される本プログラムが、新たな非文字資料研究を確立するという学際的な研究領域であり、今後、この研究を継承発展させていくことで、世界に発信しうる研究拠点になりうると評価された点は、研究メンバー一同重く受けとめ、終了後も「非文字資料研究センター」（仮称）として、研究を継続していくことが確認されている。そのため、すでに平成18年6月に「COE将来検討会議」を立ち上げ、新たな研究体制の構築を目指してあらゆる角度から討議し、近日、将来構想に関する計画案を作成し、大学側へ研究拠点形成の支援を要請することになっている。

若手研究者の育成については特に指摘はなかったが、本プログラムで採用したPD・RAの中から博士の学位を取得する者や大学教員などの研究職に就任する者も出ており、一定の成果はあらわれた。また、派遣研究員・訪問研究員制度も十分に機能しており、国内外の若手研究者の交流が活発に行われた。こうした若手研究者育成の制度を組み入れた拠点形成が構想されなければならないであろう。

総括

最終年度を翌年次に控えた2006年度の外部評価ということで、問題点の指摘は研究成果の内容に集中した。第一に、研究内容に関わるものとしては、「非文字資料」研究そのものの意義づけと、第二に、本プログラムで対象とした図像、身体技法、環境・景観の研究成果の「統合化」「体系化」に関する問題である。特に後者は、当初から指摘されていた本プログラムの弱点であり、残されたわずかな期間で、理論総括研究班による理論的枠組みの構築、只見町をモデルケースとした三つの非文字資料の体系化、実験展示という方法を導入した統合、といった試みによりその弱点を克服することになる。

第三の問題は、収集資料のデータベース化と情報発信についてである。とりわけ、本プログラムを推進する過程で得た諸資料とともに、拠点の一つである日本常民文化研究所が所蔵する澁澤写真に代表される貴重資料のデータベース化と公開が期待されている。この同研究所所蔵資料の情報発信については、当初計画のある資料は本年度中にWeb上の公開などで発信されることになるが、その他の資料の情報公開は、終了後に開設が予定されている「非文字資料研究センター」（仮称）の業務として引き継がれることになる。また、そのセンターを基盤として若手研究者の育成を含めた研究活動を継続するために、「グローバルCOEプログラム」を申請する方向でその準備に取りかかっている。

なお、本プログラムの総括として、第3回国際シンポジウムを「場の記憶・からだの記憶―非文字資料研究の新地平―」というタイトルで平成20年2月に開催する。さらに、各班・課題の研究成果とは別に、それら個別の成果を通観、統合し、非文字資料の体系化を指向する総括編を刊行する。この総括編の編纂は、5年間にわたる事業に関する各種資料、情報を整理し、記録として残すことも目的としており、それ自体、6年目以降、本プログラムを継承、推進していく上での指標ともなる。

主な研究活動

（2007年6月～7月実施分）

研究推進会議

■第4回　6月29日・映像資料及び写真資料の活用に関する覚書（案）及び映像利用許諾書（案）、海外提携研究機関招聘若手研究者（訪問研究員）受け入れ、第3回COE国際シンポジウムについて　他

■第5回　7月20日・COE終了後の事業継承・発展計画、只見町との覚書について　他

全 体 会 議

■第2回　6月29日・COEプログラム（平成15年度採択拠点）フォローアップ（書面調査）回答書に対するコメント、COEプログラムと只見町の学術交流に関する覚書、COE終了後の事業継承・発展計画について　他）

研　究　会

全　　体

■第2回　6月29日・的場昭弘「ポール・リクール『記憶・歴史・忘却』を読む―非文字資料の理論化に向けて―」

班（課題）

＊課題名の表記は略称です

■6月　9日・1班「『東アジア生活絵引』編纂」研究会
■6月10日・1班「『近世・近代生活絵引』編纂」研究会
■6月12日・5班「実験展示」研究会
■6月15日・3班会議
　　・6班「理論総括研究」会議
■6月19日・3班打合せ
　　・4班「地域統合情報発信」打合せ
■6月20日・5班「実験展示」研究会
■6月23日・1班「『東アジア生活絵引』編纂」　研究会
■7月　3日・5班「実験展示」研究会
■7月　4日・1班「『東アジア生活絵引』編纂」　研究会
■7月　6日・5班「実験展示」研究会
　　・1班会議
■7月　9日・5班「実験展示」研究会
■7月16日・1班「『近世・近代生活絵引』編纂」研究会
■7月23日・1班「『東アジア生活絵引』編纂」研究会
■7月25日・1班「マルチ言語版『絵引』編纂」研究会
■7月27日・1班「『東アジア生活絵引』編纂」研究会
■7月31日・1班「マルチ言語版『絵引』編纂」研究会

主な研究活動

現 地 調 査

中村　ひろ子	山形県山形市（6月20日～21日）
平成19年度全国大学博物館学講座協議会全国大会への出席	

香月　洋一郎	山形県山形市（6月24日）
本年度の作業班報告書の原稿内容検討、およびそれに使用する写真資料についての相談	

王　京（PD）	東京都港区（7月3日）
鹿島建設株式会社において3-3班「人間活動と災害痕跡解読」のうち、「関東大震災写真データベース」作成のための技術者との打合せ	

王　京（PD）	東京都文京区（7月13日～16日）
東京大学COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」が共催する堀場国際会議「ユビキタス・メディア：アジアからのパラダイム創成」に参加	

王　京（PD）	東京都港区（7月17日）
鹿島建設株式会社において3-3班「人間活動と災害痕跡解読」のうち、「関東大震災写真データベース」作成のため、航空写真の所蔵状況とその撮影背景についての資料調査	

受贈資料一覧（書籍・雑誌）

（2007年4月～7月）

タイトル	発行所
・『小桜韋威鎧 兜・大袖付　復元調査報告書―楯無鎧の謎を探る―』 ・『研究紀要』第1集　2007	山梨県立博物館
・国際シンポジウム報告書『日本・中国・世界―竹内好再考と方法論のパラダイム転換―』 ・公開シンポジウム報告書『中国企業の海外進出と国際経営』 ・論文『現代中国学の方法』 ・論文『現代中国環境基礎論―人間と自然の統合―』 ・2004年度国際シンポジウム報告書『激動する世界と中国』（第1部）・（第2部） ・2005年度国際シンポジウム論集 『現代中国学方法論とその文化的視角』（方法論・文化篇） 『現代中国学方法論とその構築をめざして』（政治篇）・（経済篇）・（環境篇）	愛知大学21世紀COEプログラム 「国際中国学研究センター」
・「成果報告書」（平成14年度～平成18年度）	愛媛大学21世紀COEプログラム 「沿岸環境科学研究拠点」
・『F-GENSジャーナル』No.7	お茶の水女子大学21世紀COEプログラム 「ジェンダー研究のフロンティア」
・ニューズレター　No.10 ・報告書『CHISE Conference 2005』 ・漢字文化研究年報　第二輯 ・中國石刻文獻研究國際ワークショップ報告書	京都大学21世紀COEプログラム 「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」
・ニューズレター　No.15、16	京都大学大学院法学研究科 「21世紀型法秩序形成プログラム」

受贈資料一覧（書籍・雑誌）

（2007年4月～7月）

タイトル	発行所
・最終報告書 ・『Aiming for COE of Integrated Area Studies FY2002-FY2006』	京都大学21世紀COEプログラム 「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成―フィールド・ステーションを活用した臨地教育・研究体制の確立」
・ニューズレター　No.15	京都薬科大学21世紀COEプログラム 「伝承からプロテオームまでの統合創薬の開拓」
・ニューズレター　No.9 ・議事録『Ecology and Aquaculture of Bluefin Tuna』	近畿大学21世紀COEプログラム 「クロマグロ等の魚類養殖産業支援型研究拠点」
・『近代的心性における学知と想像力』 ・『句題詞研究―古代日本の文学に見られる心と言葉―』 ・研究展覧会資料『テクスト・イメージ・コンテクスト―「みること」の心性』 ・論文集『Corners of the Mind』	慶應義塾大学21世紀人文科学研究拠点 「心の解明に向けての総合的方法論構築」
・欧文紀要　No.7	慶應義塾大学21世紀COEプログラム 「多文化多世代交差世界の政治社会秩序形成 ―多文化世界における市民意識の動態―」
・成果報告書『神道研究の国際的ネットワーク形成』 ・『現代・神社の信仰分布』（訂正版） ・研究報告書　No.1～No.3 ・『日本文化と神道』No.3	國學院大學21世紀COEプログラム 「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」
・研究成果報告書（最終年）	静岡県立大学21世紀COEプログラム 「先導的健康長寿学術研究推進拠点」
・ニューズレター　No.10	東京大学21世紀COEプログラム 「心とことば―進化認知科学的展開」
・UTCP Bulletin　No.7～9 ・UTCP研究論集　No.7～10	東京大学大学院総合文化研究科21世紀COEプログラム 「共生のための国際哲学交流センター」
・Linguistic Informatics7 『Linguistic Informatics and Corpus Linguistics』 ・言語運用を基盤とする言語情報学拠点研究成果（2002.10～2007.3）	東京外国語大学21世紀COEプログラム 「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」
・ニューズレター　No.20、21	東京工業大学21世紀COEプログラム SIMOT「インスティテューショナル技術経営学」
・『Wind Effects News』No.15	東京工芸大学21世紀COEプログラム風工学研究センター 「都市・建築物へのウインド･インフェクト」
・最終報告書（2007年3月）	東京農工大学21世紀COEプログラム 「新エネルギー・物質代謝と『生存科学』の構築」
・「COE国際シンポジウム：The 4th International Symposium on Bioscience and Nanotechnology」（2006/11）の講演集	東洋大学21世紀COEプログラム 「バイオ・ナノエレクトロニクス研究センター」
・ニューズレター　No.6 ・『一神教学際研究』No.3（日本語版）・（英語版）・（アラビア語版） ・『CISMORユダヤ学会議報告書』第2号	同志社大学21世紀COEプログラム 「一神教の学際的研究」
・『Radiation Risk Perspectives』	長崎大学21世紀COEプログラム 「放射線医療科学国際コンソーシアム」
・『日本漢文学研究』No.2	二松学舎大学21世紀COEプログラム 「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」
・ニューズレター　No.13	一橋大学21世紀COEプログラム 「現代経済システムの模範的評価と社会的選択」
・第4回国際ワークショップ記録集 ・COEサマースチューデント制のまとめ（2004年～2006年）	藤田保健衛生大学21世紀COEプログラム 「超低侵襲標的化診断治療開発センター」
・ニューズレター　No.6 ・研究成果報告集『国際日本学』No.4 ・研究叢書5『相互理解としての日本研究―日中比較による新展開―』	法政大学21世紀COEプログラム 「日本発信の国際日本学の構築」
・『科学技術動向』No.72～75	文部科学省科学技術政策研究所 科学技術動向研究センター
・『京都歴史災害研究』No.7	立命館大学歴史都市防災研究センター

COE調査研究協力者

本プログラムの調査研究活動を支援していただく今年度のCOE調査研究協力者として、
本年6、7月に追加委嘱された方々です。

氏　名	所属部局・職名	所属課題班
蔡　文高　CAI Wengao	神奈川大学法学部　特任准教授	マルチ言語版『絵引』編纂
高坂　嘉隆　KOHSAKA Yoshitaka	鹿児島県大島郡喜界町役場産業振興課　嘱託獣医師	景観の時系列的研究
西田　幸夫　NISHIDA Yukio	東京理科大学工学部　非常勤講師	人間活動と災害の痕跡解読
小松　大介　KOMATSU Daisuke	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程	地域統合情報発信
フレデリック　ルシーニュ　Frédéric LESIGNE	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程	地域統合情報発信
新国　勇　NIKKUNI Isamu	福島県南会津郡只見町役場総務企画課　課長補佐	地域統合情報発信
厳　明　YAN Ming	獨協大学国際教養学部　特任教授	『東アジア生活絵引』編纂

2007年度　海外提携研究機関の訪問研究員

本プログラムより招聘される若手研究者は、
約2週間、それぞれの研究課題にそった調査研究を行います。

訪問研究員

氏　　名：西村　真志葉　NISHIMURA Mashiba（北京師範大学文学院PD）
受入れ期間：2007年7月25日～8月7日
研 究 課 題：公私研究機関における非文字文化再構成の実践についての調査研究

氏　　名：衣　暁龍　YI Xiaolong（華東師範大学中国民俗保護開発研究センター博士生）
受入れ期間：2007年7月26日～8月8日
研 究 課 題：浮世絵の中の日本らしさ

氏　　名：蒋　明智　JIANG Mingzhi　（中山大学非物質文化遺産研究センター教員）
受入れ期間：2007年10月1日～10月14日
研 究 課 題：中日龍母伝説と信仰の比較研究

●お詫びと訂正

16号に掲載した記事について下記のように訂正します。

P.2　表紙写真説明

11行目：機械工学センターNCI作業実習室 ⇒ 機械工作センターNC工作実習室　に訂正
15行目：機械工作科主任 ⇒ 機械工学科主任　に訂正

P.3　特集　公開研究会　はじめに

右段3行目：平沢屏山 ⇒ 小玉貞良　に訂正

P.15　特集　公開研究会　おわりに

右段18行目：林健太郎氏 ⇒ 林昇太郎氏　に訂正

P.25　研究エッセイ

図1：作図者・堀内晃寛 ⇒ 堀内寛晃　に訂正

P.31　編集後記

17行目：機械工学センター ⇒ 機械工作センター　に訂正

編集後記

今回はインタビュー3本。このニューズレターもあと2冊の刊行で終わりです。これから最終的なプロジェクトのとりまとめに向けて様々な資料集、報告書の刊行作業も始まります。にぎやかな秋になりそうです。
これまでニューズレターの1号から本誌の作業に関わってくれた関さんが、この号が出る頃にCOE支援事務室をやめることになりました。ごくろうさまでした。（香月）

最終年度の今年は、印刷物の刊行だけでなく実験展示や国際シンポジウムなど、研究成果の発表が目白押しです。わたしが本誌編集に携わるのは今号で最後になりますが、今年度刊行される残る2冊の中でもこれらの紹介がなされる予定ですので、ぜひ会場へ足を運んでいただけたらと思います。
最後になりますが、本誌の編集にあたりお世話になった先生方、研究員の方々、関係各所の方々に、この場をお借りして御礼を申し上げます。どうも有難うございました。（関）

Information

COE

入場無料

実験展示
「あるく―身体の記憶―」

●日時：2007年11月1日(木)～30日(金) 10:30～16:30
＊11月3、4日を除く日曜・祝日は休館

●会場：神奈川大学横浜キャンパス3号館 常民参考室

●主催：神奈川大学21世紀COEプログラム
「人類文化研究のための非文字資料の体系化」
研究推進会議

＊展示の内容については本誌3～8頁をご覧ください。

第3回 神奈川大学COE国際シンポジウム
「場の記憶・からだの記憶 非文字資料研究の新地平」

これまでの2回の国際シンポジウムを承け、研究成果を踏まえた新たな情報発信の試みを公開提示するとともに、本プログラム活動全体を総括するイベントになるように企画しています。

参加無料

●日時：2008年2月23日(土) 10:00～17:30
24日(日) 10:00～18:00

●会場：神奈川大学横浜キャンパス16号館 セレストホール

●プログラム：

1日目
セッション1 「マルチ言語版『常民生活絵引』の編纂刊行」
セッション2 「租界、神社の遺跡から過去の実態を読み解く試み」
セッション3 「インターネット・エコミューゼアムの可能性
―地域研究と情報学の連携―」

2日目
セッション4 「身体技法および感性の資料化と体系化」
セッション5 「身体技法を展示する」
総合討論

●主催：神奈川大学21世紀COEプログラム
「人類文化研究のための非文字資料の体系化」
研究推進会議

＊プログラムの内容については変更になる場合もございます。

ホームページがリニューアルされました

2007年9月より掲載情報がより豊富に、機能的にリニューアルされました。ぜひご活用ください。

http://www.himoji.jp/

日本常民文化研究所
Institute for the Study of Japanese Folk Culture

『民具マンスリー』40巻4号～5号
2007年7月～8月発行 各A5判 24頁

●発行：神奈川大学日本常民文化研究所

●内容：4号…資料紹介「四季農耕図」絵馬（川向富貴子）、正月景品の社会史―添え物・福引・福袋―(二)（大門哲）
5号…焼畑のムラづきあい―静岡市葵区田代の出作り生活―(松田香代子)、資料紹介 繭用の紙桝（飯田孝）、【各地の取組み】鳥取県における民具調査の取組み（樫村賢二）

神奈川大学日本常民文化叢書 7
拵嘉一郎著
『澁澤敬三先生と私―アチック・ミューゼアムでの日々』
2007年10月中旬刊 A5判 約280頁

●発行：平凡社（予価 4,000円）

外国語学研究科 中国言語文化専攻
The Course of Chinese Language and Culture, Graduate School of Foreign Languages

ワークショップ
「中国進出の日本企業と建築文化
―戦前の紡績業を事例として―」

●日時：2007年10月26日（金）14:00～18:00

●会場：神奈川大学横浜キャンパス1号館 308室

●報告：1. 冨井 正憲（神奈川大学工学部）
「上海・青島の在華紡建築調査報告」
2. 藤谷 陽悦（日本大学生産工学部）
「日本の紡績建築―兵庫県を中心に」
3. 富沢 芳亜（島根大学教育学部）
「在華紡と中国」
4. 庄 維民（中国山東省社会科学院）
「近代日本の青島での紡績業及び山東経済の変遷」
●司 会…大里 浩秋（神奈川大学外国語学部）
●コメント…貴志 俊彦（神奈川大学経営学部）
孫 安石（神奈川大学外国語学部）

●共催：神奈川大学大学院中国言語文化専攻
神奈川大学共同研究奨励助成金租界研究グループ

各研究所・研究科 問合せ
刊行物や催し物については該当する各所にお問合せください。

045-481-5661（代）

●日本常民文化研究所（内線4358） ●歴史民俗資料学研究科（内線4024）
●中国語共同研究室（内線4525） ●COE支援事務室（内線3532）

非文字資料研究 No.17

発行日 第17号 2007年9月30日 発行
編集・発行 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
The Kanagawa University 21st Century COE Program Center
Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1
■Tel.045-481-5661 ■Fax.045-491-0659 ■URL http://www.himoji.jp/